都名所圖會

平安城

内閣文庫
和書 類
二一五七 號
六 冊
七二 函
一四 架

太政官文庫
和書 門
二一五七 號
函
架
六 冊

内閣文庫

番號	和	11157
冊數		6（2）
函號	172	179

綴じ部（喉部分）の文字など開きが不鮮明な箇所あり

国立公文書館
National Archives of Japan

都名所圖會巻之二目録

平安城尾

冠者殿祭　祇園御旅所　四條道場金蓮寺　十住心院 染殿地蔵
大雲院　祇園會鉾圖　同山鉾圖　手洗水圖
座頭積塔　四条河原夕涼之圖　同芝居　目疾地藏
宮川 鴨川の末　建仁禅寺　蛭子社　六道珍皇寺
六波羅蜜寺　姿見の池　阿古屋塚　焔魔堂
愛宕寺　晴明社　十禅寺社　若宮八幡
五條橋　首途八幡　御影堂　鏡の池
塩竈井　本覚寺　塩竈山上徳寺　塩竈社
太子堂　新善光寺　蓮光寺　長講堂
萬年寺天満宮　竹林院　鬼頭天皇　等善寺
橘行平御塚　市中山金光寺　延壽寺　夕顔塚

明治十三年購求

籬の池　藍染川　花園稲荷社　俊成卿社
佛光寺　神明宮　太原社　白天神
因幡薬師　繁昌社　朝日宮　神明宮
諏訪社　新玉津嶋社　菅大臣社　五条天神宮
一音寺　壬生寺　同狂言圖　蛭子森
新住吉　荒神社　化粧水　杦揺子
天道社　御太刀松　石上宮　更雀寺
本國寺　加藤清正墳　人丸社　醒井　西本願寺
古醒井　興正寺　常樂寺　東本願寺
東殿　松明殿　稲荷祭礼圖　金光寺
成真寺　判官塚　宇賀社　藪内紹智家
芹根水　月見橋　稲荷社　不動堂
道祖神　稲荷御旅所　蔵王森　寛算石

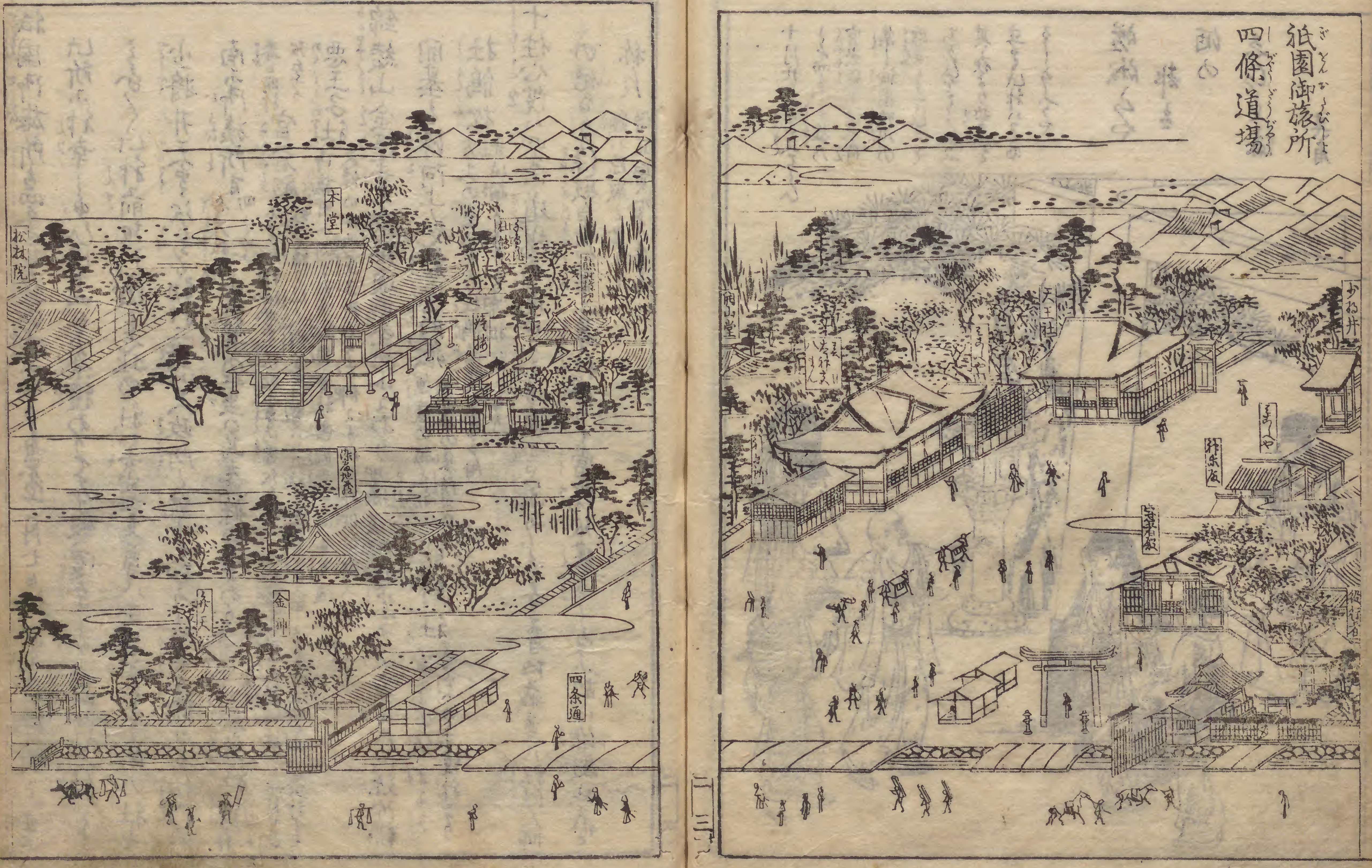
春日森　古御旅　宋守長者　粟嶋社
古井社　清盛旧地　住吉社　東寺
三鈷松　松子坊松　羅生門旧跡　大通寺
六孫王社　誕生水　満仲公誕生地　歓喜森
福大明神森　人丸塚　嶋原傾城町

十月廿日ハ誓文はらひとて四条京極乃官者殿に詣て群集し祇園鴨川の浮女もまいり来てちかひをとくといふ其夜より誓文を立ても此神ハうけゆるしぬとかや

濯滅ふや
都を
酒の
ゑひもと謙

其角

祇園御旅所
四條道場



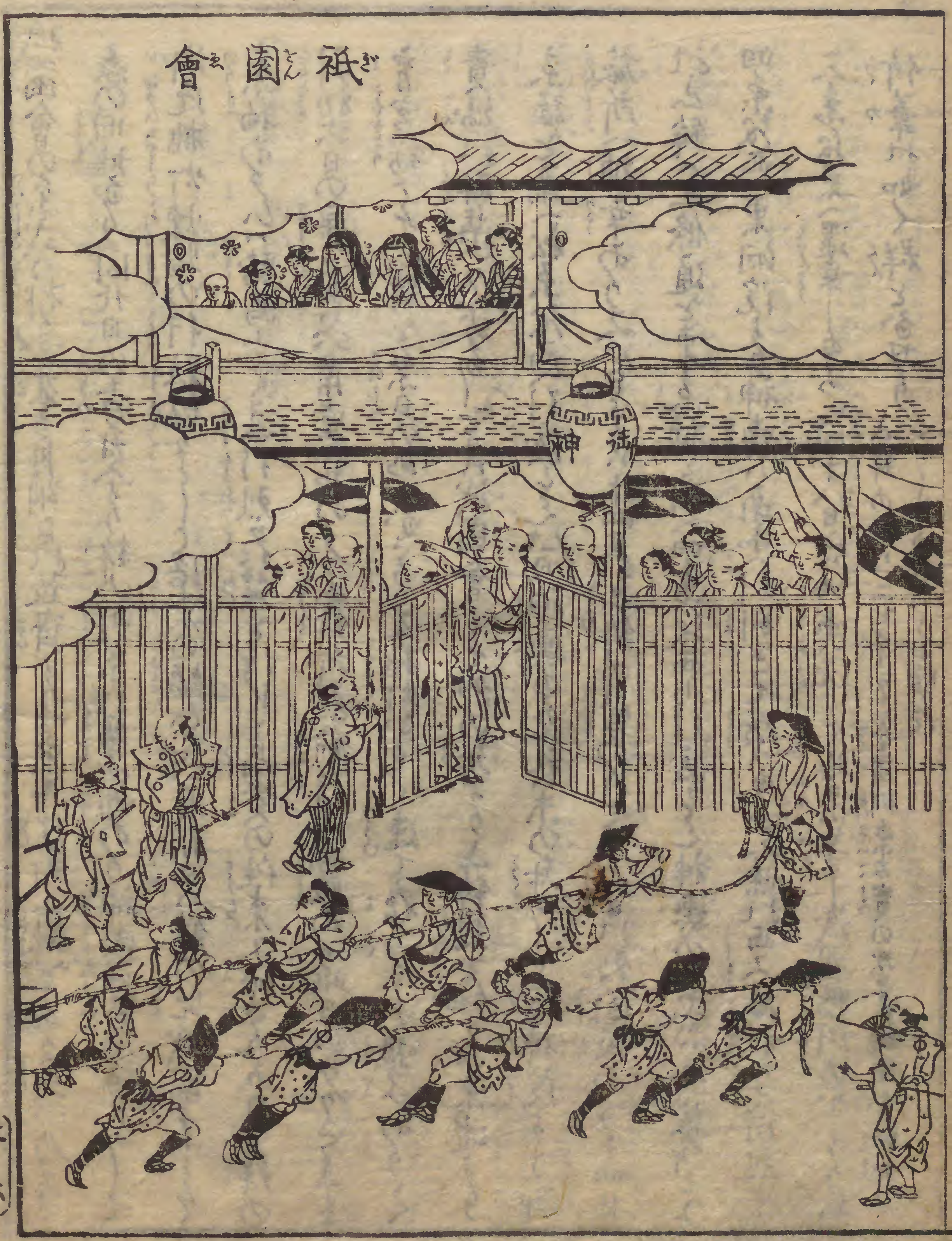
大雲院

祇園御旅所ハ四条京極の辻にあり毎年六月七日祇園會にハ神輿三基
此所に神幸しあひだ十四日に祭禮ありて本殿へ還幸し給ふ兩日ハ山鉾を
ひく此神輿前後に引渡すを北の社ハ素戔烏尊八王子をまつる南の社ハ
少将井天王をまつる初ハ二坐ハ大政所と號してむかしハ烏丸通五条坊門の
南に御旅所有（町と云ふ 今大政所）少将井の一坐ハ烏丸二條の北にあり（今少将井町と云ふ）二坐の社（天照太神 八幡宮）
春日明神 官者殿（おなじ所ニ社外ニ土佐坊正尊の霊をまつるといふ又蛭子を祭る社人群集す此日ハ商人の神と素戔烏尊の中にまします十月廿日の神として祭る）
悪王子社（御旅町の南にあり祇園會神輿臨幸の時烏丸通 又條の南悪王子町より古例によりて神輿御旅に）
錦綾山金蓮寺ハ京極通四条の北にあり 四条道場と称す 時宗にして本尊ハ阿弥陀佛
開基ハ淨阿上人の親戀地藏（運慶の作也 鳥辺野の墓所に在）初ハ 熊野社（當寺の鎮守なり 時宗の守護神なり）
杜鵑松 方丈の東にあり杜鵑洛陽に来る時 先此樹に至りて初て啼と也
十住心院ハ四条道場の南口にあり真言宗にして本尊地藏尊ハ弘法大師
の作なり染殿皇后常に尊信ありて當院を建立し給ふ故に染殿地蔵と
称す 額ハ染殿と書して 僧正賢賀の筆也

龍池山大雲院ハ京極四条の南にあり浄土宗にして智恩院に屬す本尊阿
弥陀佛ハ恵心僧都の作なり開基ハ貞安上人なりしか上人ハ安土論の時浄家の宏
才にして信長公厚く帰依し給ひ江州八幡に西光寺を建立して貞安上人
住職せし時に信長公御父子明智光秀か為に生害し給ふゆへ貞安上人御遺骸を請て
急ぎ京都に登り二条烏丸の邑に庵室を結び上人ひとへに御菩提を弔ひ其後
秀吉公の命によりて天正の末に織田信忠卿追福のため當田院を草創し上人に
卿の法名を以て大雲院殿三品羽林仙巌居士と称す 當院の號是に出たり信長公信忠公両塔此所にあり
信長公安土に御在城の時貞安上人に七種の奇物を賜ふ今當院の什宝也其中
に法然上人の一枚起請文あり是一休和尚の筆なり奥に繪讃あり圖ハ達磨大師
の後向の画なり其讃に曰

達磨悟りさとりはしらすやみのある胸にねかひを
なんて川もなれあそんてかつの邪
九年まてさせんするこそあらしやくされ識の時ハ弥陀の筆
一休判
御佛所さま

祇園會の祭式ハ例年五月朔日より致齋より四条御旅町に榊をたつる是一乃祭
表の旧地なり同廿日の吉符入より鉾の町々にハ囃子初あり神輿洗ハ同晦日にして
御迎挑灯煉物の行粧艶々しく洛東の賑ひ也六月朔日ハ鉾の児祇園社へ参
祭物あるひハ騎馬にて其行烈花麗をつくし高貴の往来に似たり五日ハ鉾の
引初六日の早天にハ六角堂において山鉾行烈前後の鬮取あり此日の夕かたより
宵宮錺として山鉾を祭日のごとくかざり立挑灯ともし連て夜もすがら囃子ありて
貴賤の群集いわん方なし七日ハ祇園會とて外の鉾より山鉾烈を糺し四条通より御
京極を南へ松原を西へ引渡をなし此日神輿の祭礼ハ未の刻にして感神院より御
旅所へ神幸あり又八日よりハ十四日の山鉾の営ありて十二日の鬮取あり十四日
の山鉾ハ三條通を東へ京極を南へ四条を西に引渡をなし神輿の祭式ハ御旅所より
四条を西へ東洞院より神輿ハ南にハ引別まで後りあひ又三條の西又旅社にて同烈し
三条を東へ還幸しあそび同十八日にハ御神輿洗して晦日に等し祇園鴨川のかわらに
竹葦の如く群をなせり 山鉾の圖ハ二七巻にくわし全圖例祭古實の次第ハ祇園會細記に
くわしきゆへここに略す


祇園會

鉾に乗る人のきほひも都哉
其角

山鉾は祭式にあらしへとも
久しく興ありて山鉾の定
鉾は大舎人の笠鷺鉾
の跳鉾家々の笠車風流
の造り山八撥羯鼓など
いふものにて荘り麗微なり
今は和漢の錦繍をまとひ
七宝を鏤め粧厳えに
して天下無双の壮観とも
いふべし

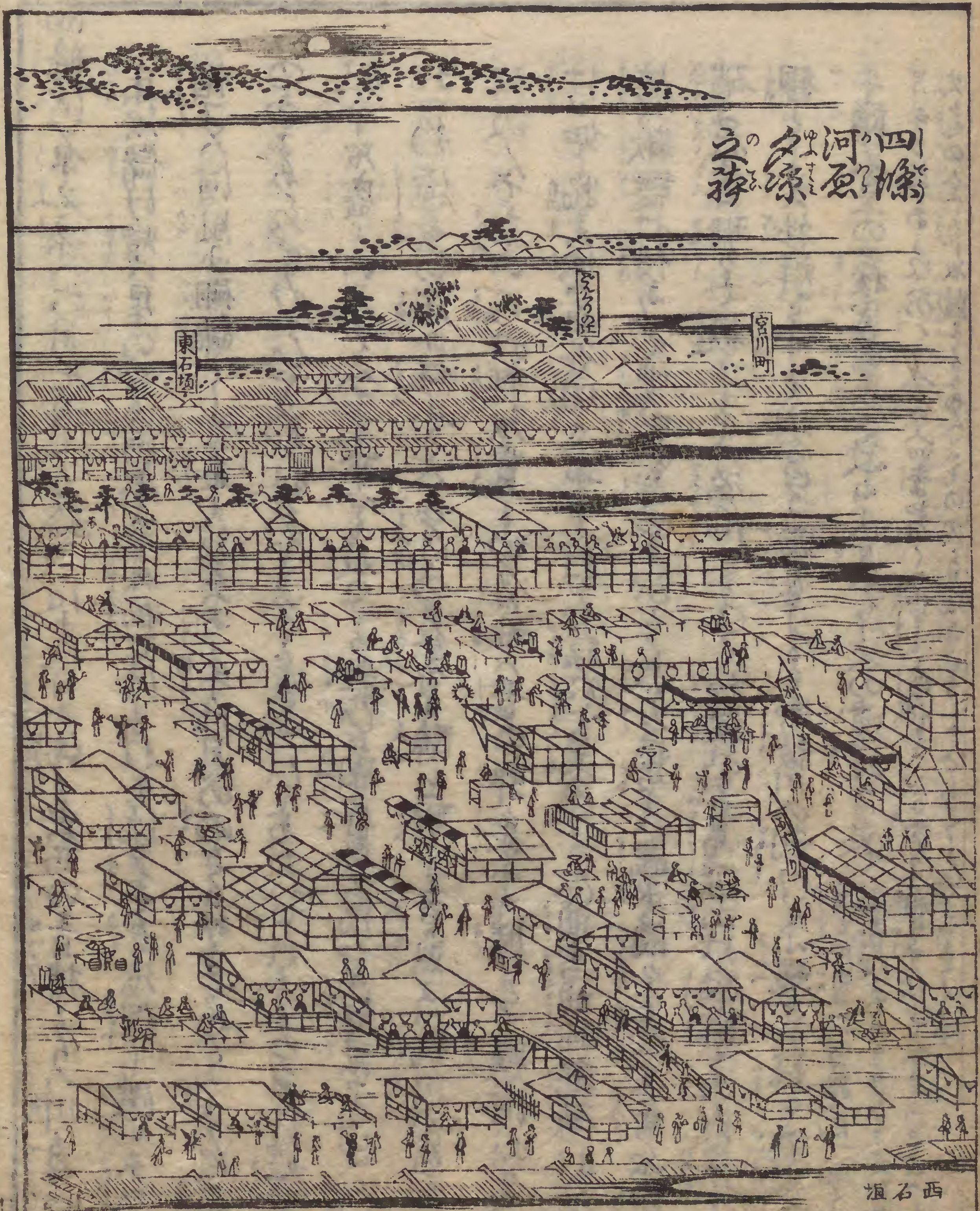
家集
かさたさは
ふるほの尾の
長き日ぬ
神の園とぞ
いく栄らん
為家

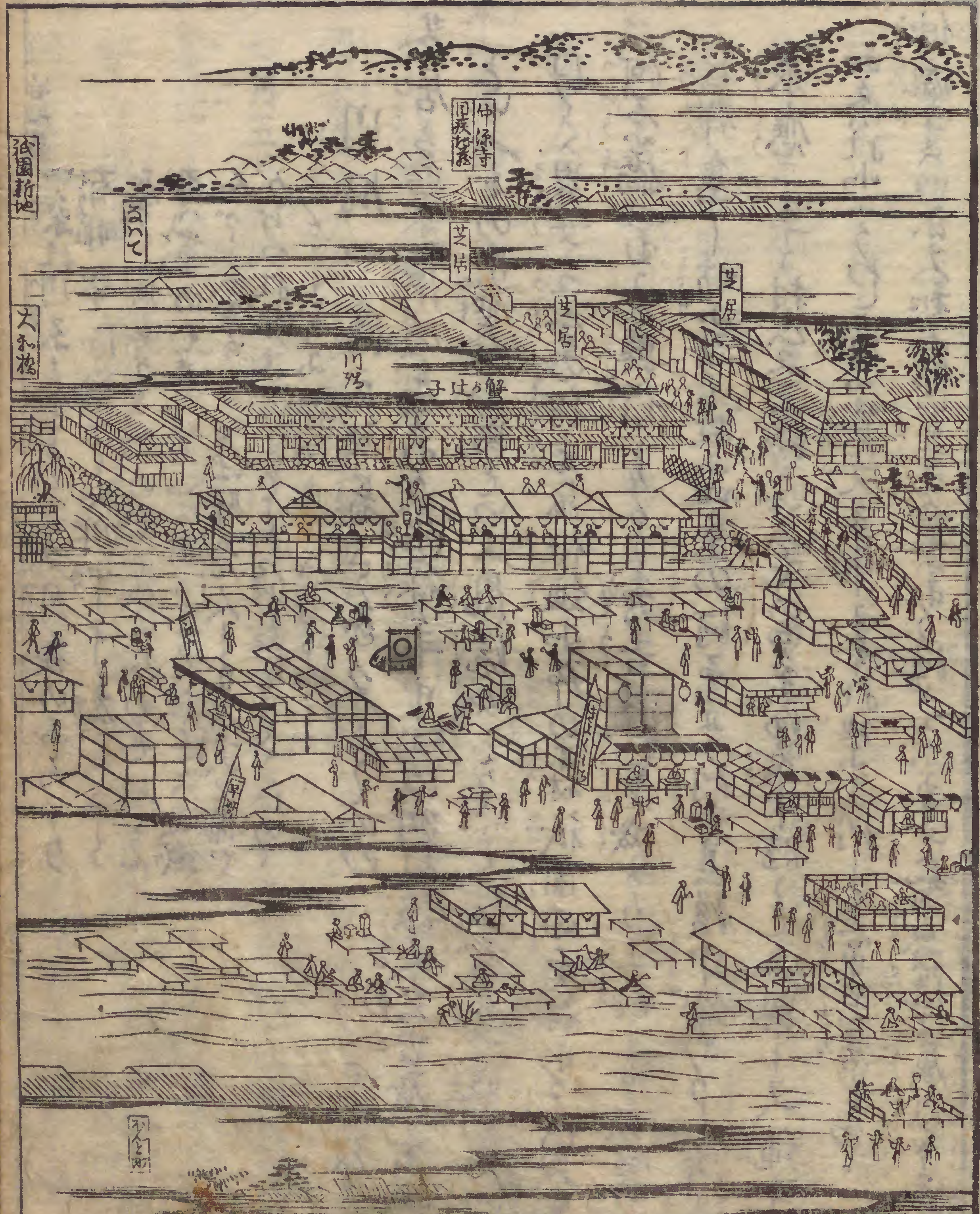
手洗水ハ烏丸通錦小路の北ニあり
ありむかし大政所町ニ
祇園神輿乃御旅所ありし
とき氏子の輩ちてみそ手水
をしなる此例によれり

今も六月七日より
十四日まで井桁
をかざりて手水所と
なづく凄冷なる
清泉にて汲取るべし
此水を服すれハ
疫病のがるとぞ

座頭積塔といふハ人王五十八代光孝天皇の姫宮雨夜内親王御眼盲給ひしそ
れより洛中の女の盲目者を集へして御伽をせさせ給ひし賤きハ官をたまふ御前
に侍らしむる事ハ御前とハいひし風儀なりそれより男子の盲人も官を賜りて
座頭と称し撿校勾當の官を得たる事ハ此内親王よりの遺風なり
毎歳二月十六日ハ此姫宮の御祥忌なれバ座頭集會をなして尊親を
拝し東の河原に出て石を積で報恩をなす故に積塔といふ又六月廿四日にも
集會をなし是を座頭の納涼といふなりされも則御弔なりとかや
今ハ高倉通五條坊門の北に集會所ありて二箇の積塔ともに會して
琵琶を弾じて平家をかたる事ふるくの旧例をもつて此法事を勤るなり
又雨夜内親王ハ雲がくれしのち後ハ凍餒のうれひあらんとて不便に
おぼしめされ洛陽の左女牛に長屋をたてそ置て今の世まで京童のあまたぎ
みいふハあめうしあくらがけ故にあて通ふといふハ此左女牛の目くらといふなる
なりとぞ
雨夜内親王の御事王代の系圖にも分明ならず後考をまつべし

四條河原夕涼ハ六月七日より始て同十八日に終る東西の青樓より川辺に
床を儲け燈ハ星の如く河原にハ床机をならべて流光に妾を侶し濃紫の
帽子ハ河風に翩翻として色よき若衆が手の月のぬるきに押もまくさん扇
のかなめをしてみやびやかなれバむかしもかくぞとおもひやらるゝは妓婦
の今を盛といろなして芙蓉も及ざる粧ひ蘭麝の香はやかなり薫て南へ行
北へ行滝宗の店に体よくハ山吹の花香に酔を醒し香煎にハ鴨川の流れ
を汲んで京の名の軽を賞しかるは咄ハ晋の郭象にも勝まで懸河の水を
注ぐ如し物まね似ハ函谷関にも押しぬる猿狂言犬のすまひ曲馬曲枕麒麟の縄
渡ハ鞦韆の伎にて喩喇の声かまびすしく左右の店にハ瀧水滔々と流て暑を避
琵琶の音ハ珊々と鳴して涼風をまねく和漢の名鳥深山の猛獣もこゝに集て
観もの数群をなして川辺に遊宴するも御祓川の例にて小縄手に祇を退散し
牛頭天皇の蘇民将来に教給ふ素戔嗚尊の遺法なるぞ
昔大内裏の時ハ群臣一同う制禁門にあつまりそろひ人形を
せりあり足をあらはせ給ふのそろへといふハ四季おりおりハ相生しも造化なる故なれバ相せせし秋のくるも
火気の金気を尅するゆへにその火気をはらはんがためなりとかや


四條河原夕涼之躰
東石垣
宮川町
西石垣


祇園新地
仲源寺
目疾地蔵
なはて
芝居
芝居
芝居
大和橋
蟹が辻子

泊船集
四条の川原すゞみとて夕月夜のころより有明過る頃まで川中に床をならべて夜すがら酒のみものくひあそぶ女ハ帯のむすびめいかめしく男ハ羽織ながう着なして法師老人ともに交り桶やかぢやの弟子子まですゞしげにうたひのゝしるさすがに都のけしきなるべし

川風や薄がき着たる夕すゞみ　はせを

芝居ハ四条鴨川の東にあり永禄年中に江州の浪人名古屋三左衛門といふもの出雲のお国といふ風流女とかたらひて舞妓と名づけ男女立合の狂言を仕組小歌の本林祇園の南林あるひハ五条河原橋の南にて興行しけるに秀吉公伏見城より上洛しあそび見物群集し妨に及ぶ故に四条の河原にうつし其後中絶ありし所に承応二年に村山又兵衛といふもの四条河原中島にて再興し又縄手四条の北にうつし遂に寛文年中に今の地にうつして常芝居となる

仲源寺ハ四条大和大路の巽の角にあり浄土宗にして智恩院に属す本尊

地蔵菩薩ハ土中出現の尊像なり一説にハ定朝の作なりとぞ世の人目疾地獄と称て眼病平愈の祈願をかくれバ霊験あり実ハ雨止地蔵ハ往来の人驟雨の時此堂に宿りしとぞ脇士にハ恵心僧都の作りたまふ阿弥陀仏ハ南の方に安置す左目の作の千手観音ハ北の方にあり薬師仏ハ方丈に安す弘法大師の作りたまふて宮川といふハ鴨川四条より南の別號なりむかし此邊に禹王の廟あり洪水を鎮む後世人家建續て町の名となれり

門前通四条より南を建仁寺町といふ中の門の南より竹垣とて塀の代りに是を建仁垣といふ

東山建仁禅寺ハ大和大路四条の南にあり五山の第三位にして開基ハ千光国師葉上僧正諱ハ栄西といふ産ハ備中国吉備津の人にして賀陽氏なり薩州の刺史貞政の曽孫なり建保三年七月五日寂す七十五歳土御門院の勅願にて征夷将軍源頼家卿敷地を寄附しまひ建仁二年伽藍ことごとく造栄し勅願所となりて年号を以て寺號とす仏殿の本尊ハ釈迦仏脇士ハ迦葉阿難なり開山塔を興禅護国院と號して東の丘にあり栄西国師の廟塔なり又国師宋国より

建仁寺
方丈
建仁寺町

佛殿
方丈

帰朝の時携へかへりし菩提樹ハ當院にあり（今ハ繁茂して数株となる）河原院跡ハ佛殿の北
に二ツの鐘堂あり東の大鐘ハむかし左大臣融公六條河原に殿舎を建られし後に佛
閣と為し河原院と号しける所にありし鐘なり荒廃の後鴨川七条の南の深淵
に沈む榮西國師是を窺知りて官吏に許を求て當寺に揚る此鐘の淵を
引上る時更に動かざりし故國師の弟子ひとりとして力者の音頭をとり榮西と唱へ又國
師の弟子長首座と呼んて引だしと教へり力者大勢是を合せ鐘を揚しとなん
と當寺にうつせり（今重き物を引に此名を呼て運送するハ此所謂なり又鴨川七条の南七町に釜が淵といふあり此鐘の沈みありし所也寛ハ鐘か淵なり）
又此鐘毎夜子の時より数九十五撞之晨鐘ハ十八聲之合て百八撞く音ハ陀羅
尼経を誦して撞しゆへ此鐘の音を称して建仁寺の陀羅尼と云池を法水池と
號し中門を冬立門と呼ぶ（平家の一門門脇教盛卿禅居あるゆへ摩利支天を安）の鐘の門なりとぞ
至元嘉暦二年唐土より将来せし靈像也（應験新にして常に詣人多し）妙徳石（小まの方丈の）焼香橋（溪鎰の小）
の石橋 楽神廟ハ國師の勧請にして當山の鎮守也（佐中玉吉佐佐文の弟三神を御前鎮なるなり）
板に 方丈の 正伝院にあり則有楽翁
安國寺塔（庭にあり）織田有樂塔 の数寄屋あり

六道
珍皇寺
薬師堂
地蔵堂
西福寺
不動
姿見池

六波羅蜜寺
本堂
阿古屋塚

蛭子社ハ建仁寺門前にありゑびす所蛭子命栄西国師勧請しゑまふ所なり
建仁寺境内の鎮守
とん例祭ハ九月十六日

等覚山念仏寺ハ六波羅蜜寺の西にありむかしハ此辺を愛宕里といふ今も此名あり 当寺に止りて世人愛宕寺と称す
真言宗にして開基ハ弘法大師中興ハ千観内供之本尊観世音千観の作
なり左右の脇士ハ毘沙門地蔵尊千観内供ハ自作の像を安す此人姓ハ橘氏
相剋の刺史中納言頼顕卿の子之幼名ハ千観丸といふ成長して叡山運照
内供の室に入て出家し顕密の碩学となりて一世の間常に十六字の仏号を
修とぞ寿止事なし故に念仏上人とよぶ又堂内に地蔵尊を安置す此
像を火伏地蔵と称して毎歳正月二日経を読て諸人火伏の札を出す是
を天狗真と称す車寄松 此松に轅を寄しとぞ 千観内供法皇の車に参りて往来し

普陀洛山六波羅蜜寺ハ六道の西にあり真言宗にして智積院に属す本尊
十一面観音ハ立像長ケ丈空也上人の作也 西国十七番の札所又洛陽観音巡の其一なり
村上帝御宇天暦五年に疫癘時行て死るもの数多し彼空也上人是を

憐みて十一面観音の像を作りて車に乗洛中を自ら牽ありき其上當寺
本尊之観音に供ずる典茶を病人にあたへけるに一日に平愈す村上帝是を
感じて吉例とし毎歳元三に服しめ給ひ万民今に此例を行ひて名ハ王服と
号し年中の疫を免るとなり北の方ハ地蔵尊を安置す いにしへハ此尊像を本尊として六波羅の地蔵堂
と号す康頼の宝物集に曰東山に貧き女ありけり年来此地蔵を信じける此女に年老たる母を持けり
とりわけ病をうけ死してありけるに葬んと案じ煩ひ居ける程にあるに
乃僧来て人出来て何事にやとくハ欲たつねて向かれば事の子細をありのまゝにかたり
ける僧きゝて哀におもひよりてしくしとせてあとの背にうちかけ負つゝそ
去ぬやがて葬送しまいらせけるの其後此女ありしたふしたれハ初六波羅の地蔵の
為なりけると云ひて参りて拝しまゐらせけれハ地蔵の御足に土おほくつけてぞおはしましける
またりして此地蔵をば山をくりの地蔵とも御手に老母の髪を持て居させ給へバかづら
かけの地蔵とも号しける
南れ方ハ薬師仏を安置す伝教大師の作也開山堂ハ空也上人自作
の像あり姿見の池ハ上人ここに姿を映し自像をきざみ給ふとぞ

阿古屋塚 本堂の北にあり又条坂の北に女阿古屋が塚の上に
無縁の石塔弁天のやしろあり
空也上人いせ右衛門が縁辺のゆゑ
弁慶よりけくうれ帰命ぞ
弥陀このむね空しくなりにければ我此所の神といふなし

上人ありし所ゆゑにて
世の中はさしもなれるの雨やどりつかのかりやは来世なりけり　空也上人

拾遺
一聲も南無阿弥陀仏といふ人の蓮の上にのぼらぬはなし　仝

珍皇寺は建仁寺の南松原通にあり 六道と号す 本尊薬師仏は伝教大師の作にて開基は慶俊僧都中興は弘法大師 篁堂には小野篁の像を安置す 此所冥土へ通ひし道なりとぞ 焔魔堂は東の方にあり 迎鐘は七月九日十日参詣の人此鐘を撞て聖霊を迎へしむるゆゑに六道辻 前にあり 本堂の當寺は久代平安城の葬所なり 桓武天皇延暦十三年に長岡より此京にうつし給ひし時此所を庶人の葬所に定めらる 由廷都記にいはくこゝより左は愛宕といふ 源氏物語に桐壺の更衣を愛宕といふ所にいといかめしうしてとあるも此所の事なり 葬てゆきしといふ所に其さまを 河海抄には弘法大師の聖跡として東寺の長者官領しけるとかや 今は建仁寺の塔頭大昌院の兼帯所とする

北斗堂はおなじく六道の東此町北にあり北辰を祭る 又松に高燈籠をかけけり 城南淀川の囲船運送の目当に常夜燈をとりやりし 熊野の謡曲に北斗の星の曇りなきと記る 六波羅之応仁の兵火にちりて一条 金森宗和江府より上洛の時清水寺に詣て此燈籠の倒れて苔に埋しを寺僧にもらひうけ吾妻の寺物として今は其の邸館にあり

晴明社は宮川町の東松原の北にあり 古へ此地は安陪の晴明の塚ありしが新道の家居其囲に及んで次第に塚崩れ平地となる故に今は社を建て其名を存す

十禅師社も晴明社の南にあり むかしは境地広くして樹林森々たり 中にも九此林に住む牛鬼斬ありしとぞ 武蔵坊弁慶も此神を念じ於て主従の約をなせしといふ

若宮八幡は五条橋東五町にあり 祭る所石清水と同神也 初は六条佐女牛にあり 故に佐女牛八幡とも號す 例祭は八月十五日放生会あり 舊地は若宮通 今の綿屋町なり 六条 今の魚棚通の南人家の裏に小社ありて其旧跡なり 此所より爰に移るは天正年中なり

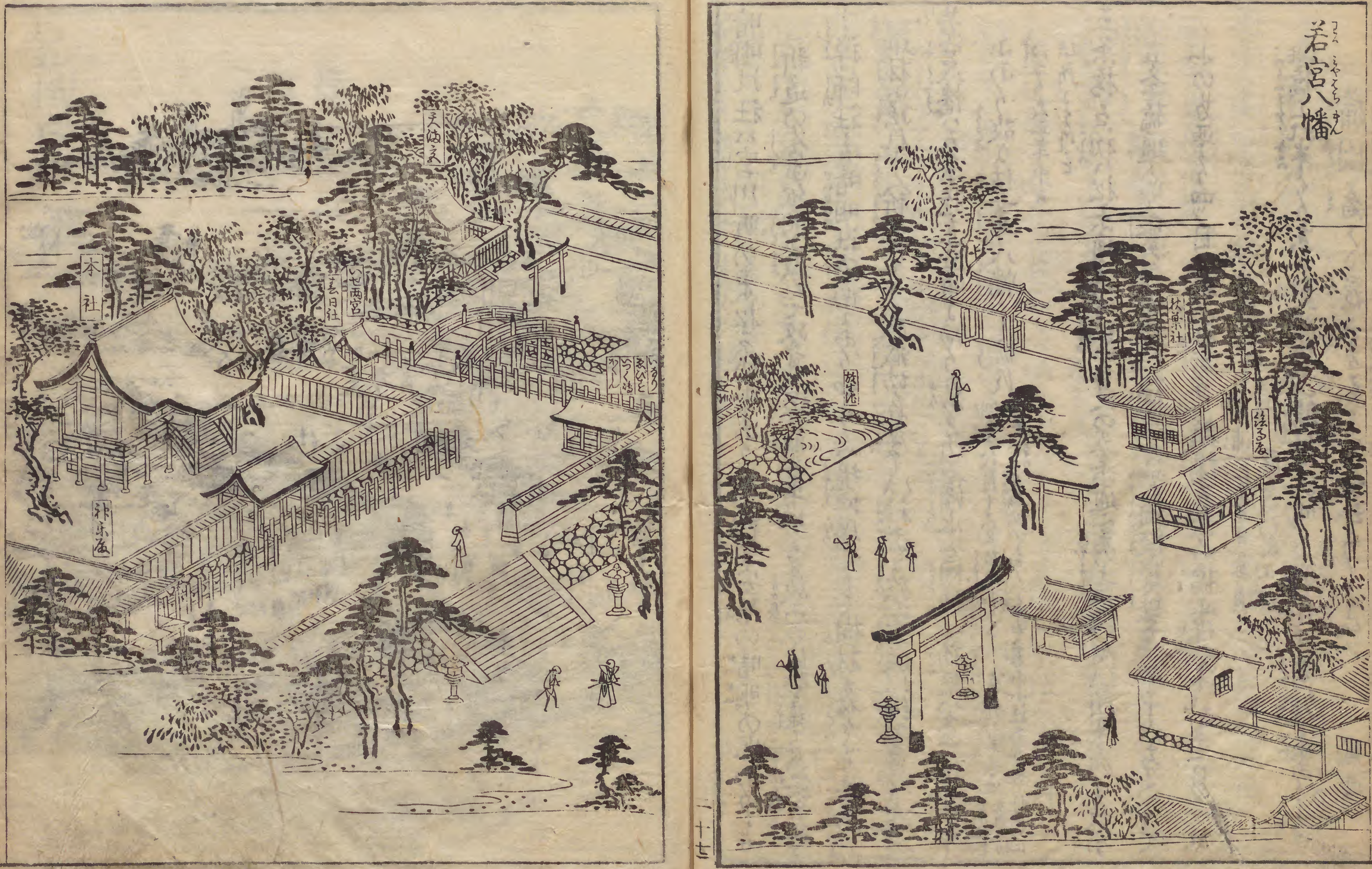
五条橋は初は松原通にあり 則ちいにしへの五条通也 秀吉公の時此所にうつされしを故に五条橋通といふ 実は六條坊門也 欄干の擬宝珠には紫銅擬宝珠あり 九とやらに十六本ありて北の方西より四ッ目に橋の銘あり 雒陽五条石橋正保二年乙酉十一月吉日

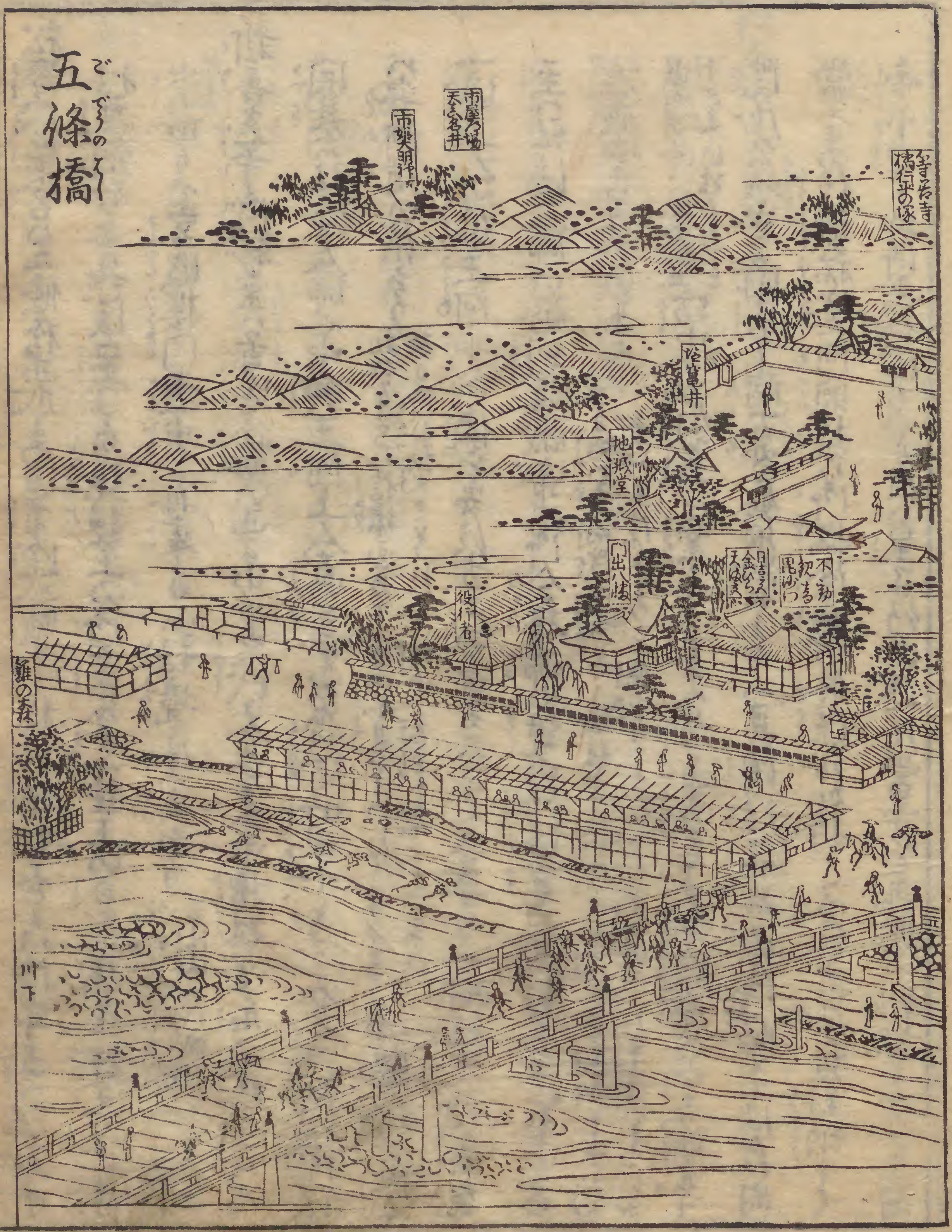
奉行　芦浦観音寺舜興
小川藤左衛門尉正長

此橋上は米をうりて東に向へば洛東の勝地木の間くに顕れて平安の佳景ここに止る

蒲團着て寝たるすがたや東山　嵐雪

若宮八幡




五條橋（ごでうのはし）
市姫明神
地蔵堂
役行者
不動
川下

上徳寺
塩竈明神
方丈
本堂
御影堂

松豊八幡宮ハ五條橋西爪にあり首途八幡とも称ス清和天皇の御宇貞觀年中の草創なり其ハ後皇子貞純親王の御霊を祭る親王の息ハ六孫王経基公尊崇ありて宮殿樓門巍峨に再建したまひ封境廣大なり 外封ハ八十二門ありしが平清盛の代滅亡して今地となる

新善光寺御影堂ハ首途八幡の西にあり仁明帝承和年中檀林皇后の建立にして開基ハ弘法大師なり中興王阿上人真言宗を改て時宗とする本尊ハ阿弥陀仏ハ安阿弥の作なり 初の本尊ハ信濃国善光寺の如来を写し作りて本尊とせしゆへ故に御影堂と号す今坊中若干あり 脇壇にハ一遍上人の像王阿上人の像を安す方丈の本尊ハ一光三尊にて阿弥陀観音勢至ハ弘法大師の作則嵯峨帝の御念持仏也鏡の池塩竈の井ハ本堂の東にあり地蔵堂ハ方丈の南にあり 當寺始ハ東洞院春日にあり檀林寺の別所にて尼寺なりしが永安年中に炎上し東洞院にうつし応永廿八年佐女牛室町の北に引寺後一年又条新町のほとりへ又天正十五年此地にうつる 坊中に扇をおりて業とする事ハ昔無官大夫平敦盛の室蓮華院尼公此寺に閑居し阿古女扇を製し給ふ其頃後嵯峨帝御悩ありしが當寺の住職祐寛阿闍梨ハ御悩除滅の修法を加持し又扇に呪文を封納して帝に上る即御平愈ましましければ皇子御の御所當寺を再興し剃髪ありし王阿上人と号しける扇ハ吉例によりて世に名あるとなり高貴の献として都鄙の賞翫となれり

河原院の旧跡ハ五條橋通万里小路の東八町四方にあり 鴨川ハ此殿舎の東の所ハ融左大臣の別荘にして基閣水石風流をつくし遊蕩の美を擅にし此家築にハ草木繁茂し四時の花絶へず池を堅て水を湛へ魚鳥ハ波に戯れ陸奥の松嶋を移し難波津より日毎に潮を汲せ管絃ハ仙臺に調ふ文籍ハ月殿に翫ぶ今大臣薨じ給ひて後寛平法皇此勝地に遊覧し東六條院と号し其後仏閣となし融公第三の御子祇陀林寺の本主仁康上人に寄て知識となし給ふ 此後釈迦仏を作り此院に安置し又河原院と號しける 今五條橋の南鴨川高瀬川の間に森あり又籬の樹といふ河原院の遺跡なり

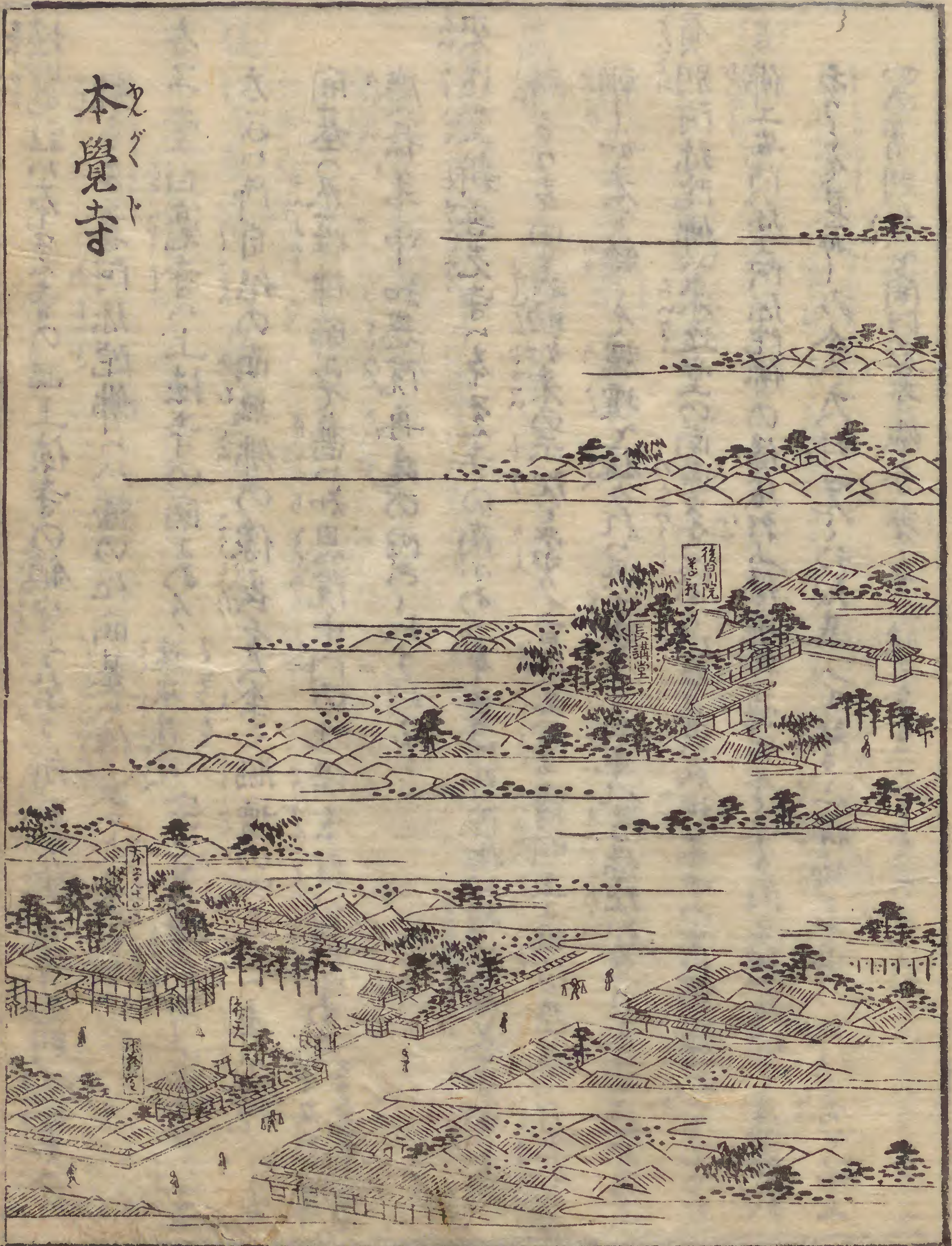
古今
君まさて煙絶にし塩竈のうらさびしくも見え渡るかな　貫之

續後拾
塩竈の浦にかれにしけふりをも宿にハうつす月かけ　業平

本覺寺ハ下寺町五条の角にあり浄土宗にて智恩院に属す本尊阿弥陀仏ハ安阿弥の作一名ハ如法仏と號す開基ハ玉翁上人なり

東九條（ひがしくでう）
判官塚（はんぐわんづか）
下寺町（しもてらまち）
長講堂（ちやうかうどう）
左子堂（ゑいしどう）

本覚寺（ほんがくじ）



塩竈社は本光寺の西上徳寺の鎮守なり所融左大臣にして則塩竈と
號を本尊阿弥陀佛は八幡の作開基は傳誉上人なり
太子堂白毫寺は上徳寺の南にあり　速成就院と号す　宗旨は律宗にして本尊聖徳
太子は御自作の南無佛の像長壱尺余脇壇の四天王は唐作なりとぞ
開基は忍性律師にて舊は知恩院中門の北浩玄院の後にあり　今其地に古井ありて太子水と號す
慶長年中知恩院再建の時こゝにうつさる

來迎堂新善光寺は本光寺の南にあり本尊阿弥陀佛は信濃國善光寺と同一
躰なり本田義助如来の示現を蒙りて百済国より來る齊明王の因浮檀金七斤を納て造
朝し如来を鑄らせ爐壇を據られ其炎中より分身せる像現れ今の本尊是也
貞別阿弥陀佛は来迎堂の南蓮光寺にあり此本尊は永禄年中に東國の僧都がこれを
佛工安阿弥に阿弥陀佛の像を作らせ像成就し帰らんとする時安阿弥此尊像希代
ありとて恩押しみ今一度拝せんと跡を慕ひて終に山科郷にて追つき此有さま語ぬ
かの僧則笈を開けば尊像分身して二躰となる二人ともに奇異の思ひをなしけるとかや

東西に負ふて別る其地を今山科の負あふといふ安阿弥が負帰しその像を當寺本尊とす
馬止地藏　當寺にあり昔弘法大師の作なり平清盛駒に乗りて通りける途に止て進まず不思議を感じて堀しむるに此尊像出現せり其より六条河原の斬罪の場にありしといふ
後白河法皇の宸影は来迎堂の東長講堂にあり當寺は法皇の御建立にして時々御
幸ありて貴賤を論ぜず叡聞に達する亡魂を名帖に記しおきて常に御回向ありて御講
を修しめ給ふ所故に長講と称す　平家物語に曰されば後白川法皇の長講堂の過去帳にも妓王妓女佛刀自等が尊霊と四人一所に入られけり
萬年寺の天満宮は長講堂の南にあり初は間之町万年寺通の南にありしを　舊地に紅梅の古木を遺せり
鬼頭天王は本光寺の東南竹林院の堂内にあり　正安二年の春後伏見院小山に御幸あり一時小面若京玄紹重清供奉し朝勇と
いふ官女を見初連理の契をなさんと思ひしが叶はず製して又八重姫を娶る朝勇ふかく嫉み水食を断て死すと
重清は菩提の爲に出家し遂に紀伊国の二鬼を語へ紀伊国より結び苦楽坊と號し終に此ところに
して居たりしが終に疫病なりけて苦悩せし時に朝勇が亡魂鬼女と現じ苦楽坊の頭を捧げて
忽平愈せしを功徳なりとて其頭を像に彫し末代其證として頭をのせし鬼頭天王と號しける
播行平卿塚は竹林院の南等若寺にあり
市中山金光寺は時宗にして本尊阿弥陀佛は定朝の作開基は宮也上人なり　初は堀川七条の北にあり今の本願寺境内なりしが此地は元市場なりより市屋の場といふ
市比賣社　當寺にあり此神は八月十三日
天真井　本堂の西にあり洛陽の名水なり
延壽寺は金光寺の南にあり本尊は丈六釋迦弥陀二尊共銅佛定朝の作なり　初は油小路五条にあり今金仏町と云

夕顔塚ハ五条にあり
今ハ堺町松原にあり
源氏物語に出る夕
このおはし所に住
たまひしといへり

新古今　夕顔をよめる
白露のなさけおきけることのはや
ほのぼのみへし夕顔の花
前太政大臣

籬の池ハ高倉五條の南宗仙寺の堂前にある井をいふ舊河原院の封境にして其遺跡なり當寺ハ曹洞宗にして開基ハ天江和尚也　本堂の額ハ正水の筆とぞ

藍染川ハ五条高倉坂経て間之町より人家の下を南へ流る濁水なり　是も河原院の旧跡といひ傳ふ

花開稲荷社ハ松原通高倉の西にあり　稲荷町といふ　此所ハ松永貞徳公羽が居所にして俳書御傘坂撰を

古宅立春といへる題五条花開の家にいりて

家集
おのかむろ葎門の松にみておくれる宿は春にあふての郷　貞徳

五条花開の宿に會しして夕顔を
小車はやどのしるべと名のりしてそこぞと我に夕顔の花　仝

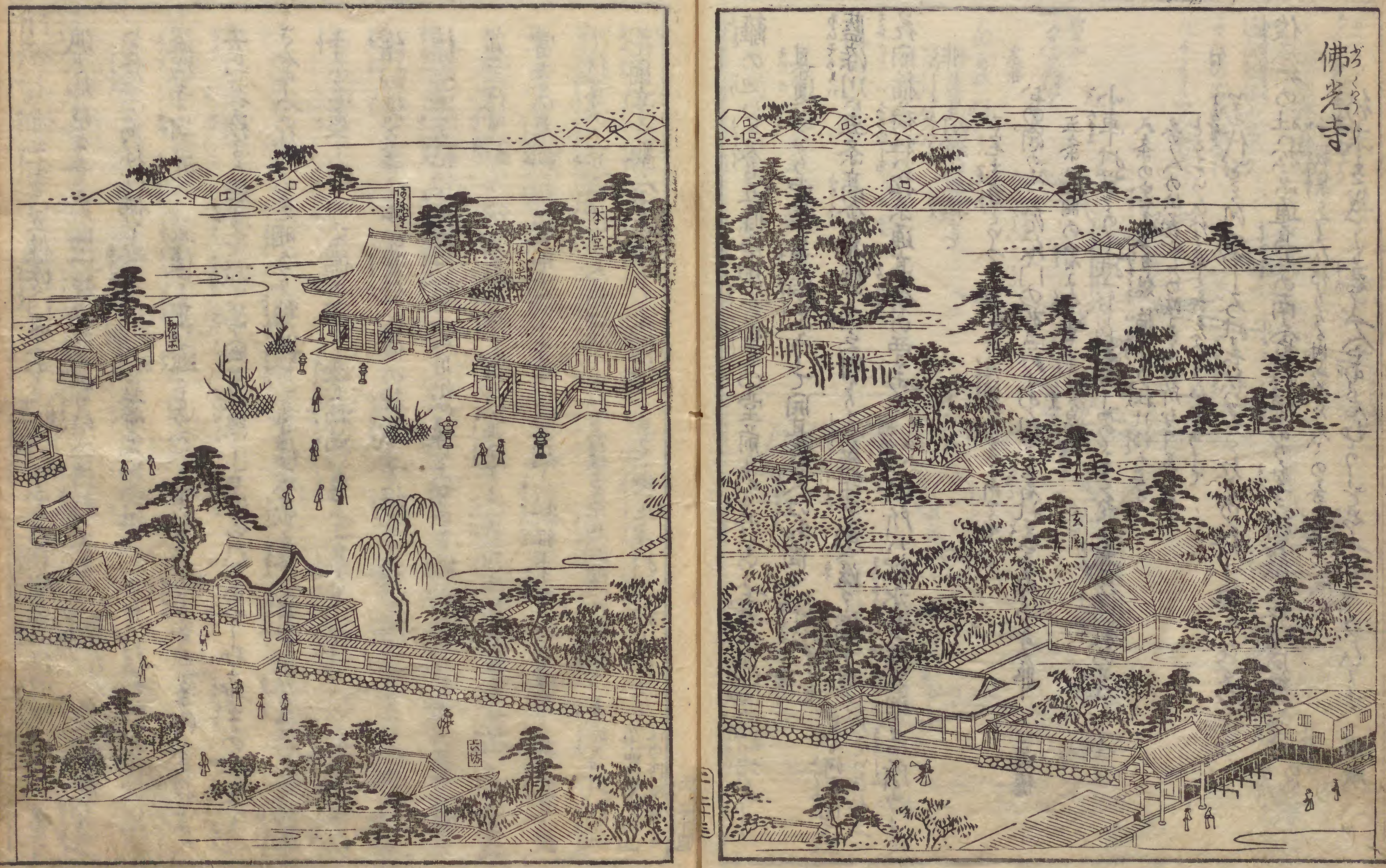
又条の宿にて夢想　稲荷の社は近きあたる
前人の此花さきの陰にきそ此所むかしの花さかえ
とこそいひ傳へぬとおもへのそへひ給ふて

日
萬代をこの川のやしろは春秋ハ花さきそのれてとみたらしの　仝

俊成卿の社ハ松原通烏丸の南人家の後にあり祭る所五條三位俊成卿の霊之　此所かの卿の宅地なりとぞ

千載集えらひ侍りける時よみ人への歌をつくりて

新古今
行末ハ我をも忍ぶ人やあらんむかしをおもふ心ならひに　俊成


佛光寺(ぶつくわうじ)
玄関
集会所
本堂
集会所
阿弥陀堂
勧化所
六坊

汁谷山佛光寺ハ五條坊門通にあり初ハ興正寺と号す宗旨ハ親鸞聖人の弘法にして佛光寺
派と称す本堂にハ開山親鸞聖人自作の御影を安置す 坐像にて長弐尺斗 阿弥陀堂本尊
ハ立像の阿弥陀佛を安置す 長三尺一寸八歩 是は覚大師の作也此本尊ハ後醍醐天皇の御宇に
盗賊寺内に乱入し尊像を奪ひ逃るといへども重くして恰方なく二条河原に投棄て
去ぬ其夜より瑞光を放て帝闕を映照し百官これをあやしむ帝光の行衛を尋
させ給ふに弥陀の光明なり勅使驚て尊像を帝に奉て宮中に安置す其後興正
寺に遷座し寺号を佛光寺と改て勅額を給ふ又宸筆を染られて親鸞聖人の
繪詞傳を書しめ給ひ専修念佛の棟梁となし給ふ上旨を給る阿弥陀堂の脇壇にハ聖
徳太子自作の木像法然上人自作の像を安置す餘間を存覚間といふ本願寺
第三代覚如上人の息存覚上人ここに寓居し六要抄四部九帖等を撰しあり又ま
當寺の草創ハ親鸞聖人四十歳の時山科郷東野村に建立し興正寺と號
し徒弟の上足真佛上人に附属しあり其後五条西洞院九條殿下兼實公の別荘
花園亭を聖人に寄附して花園院と号す興正寺の院號となせり 九十四代の帝花園院の御時園故

愍り
改む後醍醐帝の御宇元應元年に當寺を以て今比叡所中元汁谷に移を
東ハ阿弥陀峯を限り西ハ柳原に至り 今七条河原 南ハ瀧谷を限り北ハ汁谷大路に
至る其後足利尊氏公の祈願寺として佛供田を寄附しありしより宗門繁昌
し尊信れ僧俗諸国に充満し塔頭四十八坊に及べり然るに文明年中當寺十四世
の住職経豪上人山科本願寺蓮如上人に属し寺僧四十二坊其外国々の門徒
数華随順せし故に経豪上人ハ舎弟経誉上人當寺の住職として十四世と相續
す所在の六坊 今寺内にあり 秀吉公の時大佛殿建立によりて此地に移すと
四條之費ハ四条通東洞院東をいふむかし大内裏の時此所沽品販商人の市
場之 今毎朔高倉四条の北に野草の市あり往古の餘風也
神明宮ハ綾小路高倉の西にあり祭る所伊勢内外太神宮なり
大原社ハ綾小路新町の東にあり祭る所伊弉冊尊なり 丹州桑田郡大原社と同神なり
膏藥道場といふハむかし四条の南新町と西洞院の間にあり今膏藥辻子といふ
白天神社ハ東洞院と烏丸の間高辻の北にあり所之辻子といふハ清香庵と號を

西の坊
不動
書院
阿弥陀

因幡薬師
不動
大黒天
いなり
弘法
愛染

因幡堂平等寺ハ松原通烏丸にあり寺号ハ天台聖護院御門主寺僧ハ真言宗なり本尊薬師如来ハ立像にて長六尺二寸蓮台の上に立せ給ふ脇士ハ日光月光十二神ハ菩薩を安置す傳記に曰此本尊ハ天竺祇園精舎四十九院の内東北の角療病院の本尊ハ等身栴檀木の像にて釈尊みづから刻み給ふ霊容なりしが伽藍破壊に及んとするの時東方さして飛去り給ひ一條院の御宇長徳二年因幡国賀露津の海面に夜々光ありて国司橘行平卿漁人に命じて網をおろさし海底を潜しむるに光明赫奕たる薬師仏を引上奉る其後七年を経て長保五年四月七日に行平卿の居舘烏丸高辻に忽然として飛来しおはします（後光基座ハ因州に止る 座光寺と号して今にあり）則舘を佛閣に造りて安置し給ふ今の因幡堂これ也本願ハ行平卿の息光朝禅師なり別寺務としては承安元年四月八日高倉院より勅額をたまひ平等寺と號す永暦二年にハ後白河院此所に幸しありし今の堂ハ足利義教公の再建なり橘行平卿の影像ハ堂内西の間に安置す東の間にハ夜叉神を安置す（後堂に井戸あり 火災の用なりとぞ）鎮守ハ後白川帝の院宣によりて十八所の神を

勧請す（後に神託ありて蛭子神 一所をかへ故に十九所なり）観音堂の本尊ハ慈覚大師の作愛染明王弘法大師を堂内に安置す鐘堂ハ本堂の西にありて常に修連を張ふ（毎年二月十九日ハ初 鐘供養あり一日之此日に 修連を引するあれ恒例とぞ）執行薬王院にハ大黒天を安置す（当院ハ祇園御旅所の 将井社と藤帯にて毎年 六月七日此所 より児出る）歓喜天不動明王を安置す桃の坊柳坊にハ稲荷氷室秋葉社二社をまつる又虚空蔵を安置す西之坊にハ金毘羅を安置す桂芳院にハ稲荷社あり又不動役行者を安置す長伯寺ハ裸形阿弥陀仏を安置す慈覚大師二條后の願にまかせ女人成仏の證に作り給ふ金蓮寺の阿弥陀仏ハ恵心の作なり（京極誓願寺 とは称す）又粟嶋明神妙見菩薩を安置す角の坊にハ稲荷大明神鎮座又當寺の本尊ハ日本三如来の（信濃善光寺 嵯峨釈迦仏）其一にして釈尊在世の尊像ゆへ御戸開あるの時ハ勅会の法事音楽等ありて厳重なり代々の天子御厄年に当らせ給ふ年ハ毎月勅使参向ありて御祈祷ありしと薬師貴くいふ繁昌社ハ高辻新町の東にあり祭る所弁財天女也（今真言の僧 占り行なる）当社門前町の産沙神とし祭ハ九月廿日也

新玉津嶋社

新後拾遺 新玉津嶋社歌合に神祇
玉津嶋よるかゝるに云のえれ神もともみかくとやころもん
前大僧正光海

朝日宮は白山通(今の鉄屋町なり)五条の北にあり祭る所天照太神なり清和天皇の御宇貞観年中倭姫命の御告によりて丹波国桑田郡穴生村に造営しぬ其後正親町院の御宇元亀二年に今の地に遷座し(祭は九月十六日) 猿田彦神石(社内にあり霊験あらたなり) 飛梅天満宮(末社六ケ所の内にあり太宰府飛梅の古木を蔵む則菅家の額あり)

神明宮は富小路五条の北にあり古此所は融大臣の殿舎の封境にして此地に伊勢太神宮を遷拝所と後世これに社を建る(祭は右同日なり 今も言ひ伝ふ)

諏訪社は五条の南二町諏訪町にあり祭る所信濃国諏訪社と同神なり(獣肉を喰ふもの此社の神符を受けて食へば汚穢なしとぞ)

新玉津嶋社は松原通玉津嶋町にあり祭る所衣通姫にして紀州玉津嶋と同体後鳥羽院の勅請とぞ祭は十一月十二日なり(為家卿若年の時此社に毎月六度づつ百首のおこなひしなり)

新続古 たのむかな我ふるさとに跡たれて初し玉津嶋姫 前太政大臣

菅大臣社は五条坊門西洞院にあり祭る所天満天神にして則菅原是善卿の館なり祭は八月十六日拝殿の額天満宮と書るは竹内御門跡良恕法親王の筆なり 天満宮降誕之地(八分字の石表あり書は烏丸の筆なり)

誕生水(本社南の垣の内にあり烏石碑の銘を書る) 大師堂(弘法大師自作の像を安置す) 梅木社(近年上冷泉家よりあらたに勧請し給ふ)

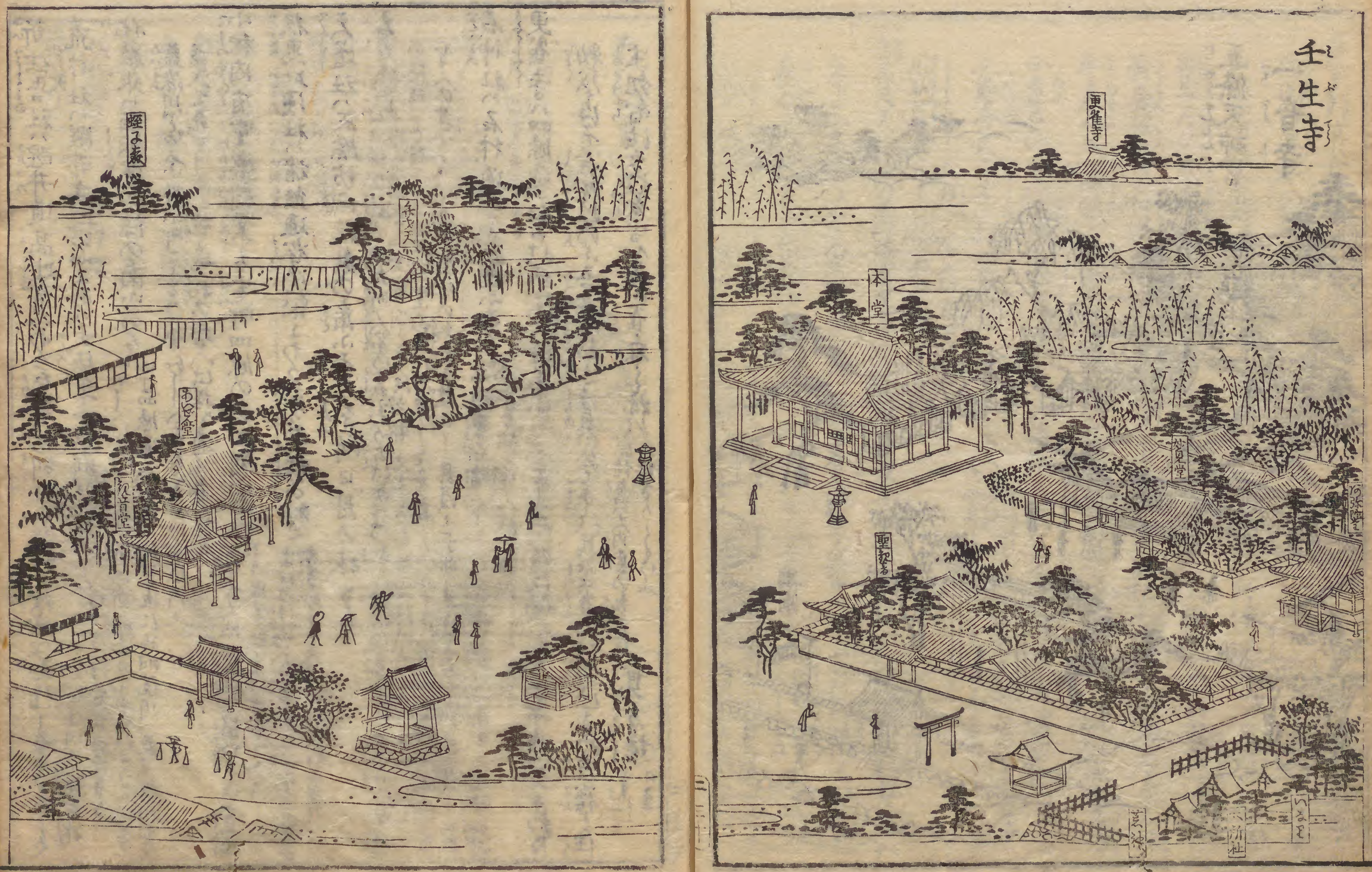
北菅大臣(菅大臣の北門の方にあり祭る所菅相の御子なり) 常喜院(北菅大臣の西に隣る荒木天満天神堂内に安置 金剛力士堂前にあり)

菅大臣社

五條天神宮ハ松原通西洞院にあり 天使社と称す 祭所少彦名命 相殿ハ皇太神宮大己貴命なり
桓武帝遷都の初平安城鎮衛の為造営し給ふ 醫道の祖神とし古ハ宮殿巍々として
東西四町南北五町の神領に巡りハ樹林森々たり 傳教弘法の両大師も入唐の時帰
朝安全の祈祀を修す 由社記にあり 永安二年文覚上人配流の時当社の鳥居の下に
黄金坂埋る計畧にて難風を免れしより 源平盛衰記にみえたり 安元元年には源
牛若丸鬼一法眼と兵書の遺恨ありて我ひの感應を得て打勝し 此所にて武蔵坊
小逢ありしも此森なり 至徳元年には将軍義満公殿舎を再建し給ふ 九月十日
之節分には白木小餅寶船坂 禁裏に上る 小餅料は文安二年将軍義輝公の母公慶寿院より御吹挙ありて始る それより今に至り公務の御法
として年々具料を賜ハ此夜法人群参して
尼難除滅を祈る三種の神物なりとうるなり

一音寺ハ天使社の西に隣る 本尊十一面観音ハ長二尺七寸 弘法大師の作 淳和帝御宇に
天下大疫を此時天皇万民の為に伊勢春日両宮へ奉幣使を立られ神託によつて和州
長谷寺の観音を拝し弘法大師に勅して造らしめ給ふ尊像なり 洛陽観音巡 第二十九番 疱瘡神
文徳天皇御宇天安二年星野茂左正利といふ人の新羅国へ渡海の時疱瘡を悩む 正利当寺の本尊を念じ
小祈りけれハ應驗ありて忽平愈し安全に帰朝し給ふ 法人疱瘡安康のため具参成ぬるなり

壬生寺（みぶでら）



新住吉社は醒井通高辻角にあり祭所樁別住吉明神之像盛久勧請し奉りしとぞ

荒神社は醒井高辻の北にあり文禄年中摂州勝尾山より勧請す 近清川に清荒神 寂初の地なり

化粧水は西洞院四條の南にあり いにしへは此所に小野小町の別荘ありしとぞこれより三間斗北に四條通人家の下を流れ西洞院川へ落る溝川あり

藍染川とは小野小町に恋慕しける人本懐をとげずして此川に身入て死せしとぞ故に婚礼の轝入此橋を通る事を忌

小松内府重盛別業は室町四條の南西側にあり 一説に大納言公任卿の旧跡ともいふ高樓ありし近辺に城を清水今にあり

松恵比須社は猪熊通松原の北にあり祭る所蛭子神之 当社の什物に和歌所の九字の名号あり十月廿日に出たと出る

天道社は五條坊門猪熊の角にあり祭所日月の神なり

左刀懸松は五條猪熊の西新町人家の裏にあり古此所は傳教大師の開基し給ふ天台の伽藍の地也 源義経此所に宿し給ひし時の陰僧より授りし左刀を懸給ひし松なりとて名とす 五十七代の上皇道珍僧都親鸞聖人の弟子と成堂舎は應仁の兵火に焼亡し其後寺を西六条御堂の前に遷て金宝寺と号す

石神社は石神通三条の南にあり 祭所豊石窓命奇石窓命之古は此地中山忠親卿の亭なり故に中山社と称す

更雀寺は四條通大宮の西にあり浄土宗にして本尊阿弥陀佛は左近中将實方朝臣勅勘をうけて奥州に吾妻に赴き陸奥に於て卒す其霊雀となりて此寺の森に棲み住む 此地旧は大内裏の勧学院の地なり 實方塔寺内にあり

主殿寮法界門の東にあり故に雀森と称す 勧学院の跡なりともいふ

あたごまゐりのこぶ狂言
むかしより定まる狂言は数其外又番あり
桶とり　花盗人
紅葉狩　猿
愛宕参り　狐塚
かうろぎり　鵺
羅生門入盲人川渡
節分　花見
猿引　焔魔角力
餓鬼責　鶏
さいのかわら　棒志ばり　性根坊主
熊坂　雁生へ　湯立
あかひの人　男伊達
棒ふり

壬生寺ハ五条坊門朱雀の東にあり宗旨ハ真言律にして和州招提寺に属す本尊ハ地蔵菩薩ハ坐像長三尺にして定朝の作也当寺の草創ハ一條院御宇正暦二年にして開基ハ三井寺の快賢大僧都也（姓ハ藤氏にて粟田関白道兼公の支族なり智證大師に隨身して大台の奥義を究む永承十六年十月十六日寂を）地蔵の尊像彫刻の志願を発し佛工定朝に命じて一千日の間に作り終る相好圓備して恰生身に向ふが如し是当寺の本尊也又持物の錫杖ハ落慶の日本尊の四方光耀くして異香薫じ音楽幽に聞へて聖衆來迎の如し午の刻に及んで漸晴ぬ本尊を拝されハ忽然として六輪の錫杖を持したまふ本尊なり故に是に此錫杖ハ（擁護）伽羅陀山にして延命地蔵経を説給ふ時地中より出現すると云々当寺の最初ハ草堂にて此本尊を安置し寛弘二年に堂供養ありて小三井寺と号す其後順徳院御宇建保年中に和州前吏平朝臣宗平本尊の利益を崇でより堂舎僧坊悉造営して此時ハ寺を宝幢三昧院と號し又地蔵院とも称す白川院鳥羽院後白河院順徳院などにも信敬ありて行幸ありし由ある縁記に委し中興ハ圓覚上人（和州服部の産にて家原寺に入て）大念佛圓覚上人より始る毎年三月十四日より廿四日に（至る種々の猿楽をなせる是を壬生の狂言といふ）

壇供（毎歳正月に鏡を備ふ諸人これを請て護符とするなり）

本圀寺

加藤清政之墓 同一族の墓
祖師堂
番神社
三光社
拝殿
骨堂
経蔵

人丸社
立像堂
客殿
拝殿
本堂
大黒堂
千佛堂
鼓楼
経堂
二王門

大光山本圀寺ハ堀川松原の南にあり法華宗にして一致派なり開基ハ日蓮上人にして
初ハ相州鎌倉松葉谷に建立ありて法華堂とかうけ一宗最初の精舎なり称
日蓮上人姓ハ三國氏 聖武帝の苗孫なり 父ハ遠州の刺史貫名重実が次男なりしかん母ハ清原氏之
貞應元年二月十六日午の刻に房州小湊浦に誕れつゝ十二才にして同國清澄寺に登り真言
を学び十六才にて落髪し名を是生と號し後に自日蓮と改む初稚より才賢にして常
に虚空藏を祈るある夜の夢に老僧来りて手に明星の如くなる宝珠を授けて授与を見たり
して一を聞て十を悟れりかくて諸宗につきて南都北嶺にいたり園城寺に入て八宗の学窓に蛍
をあつめ倩法華宗の議判家を考散しかくてをれバ藏経を撿るゆへ諸経中王最第一の金言
にいたり衆生成佛の根元するなりとて建長五年二月廿八日二十二才にして朝日に
むかひ合掌し始て南無妙法蓮華経の七字を唱清澄寺の南面にして一山の僧具外
守護職東條左金吾景信等をあつめて法花を演説し論釈の議定をあらはせり然れバ
諸宗の僧徒風に木葉の随が如し是に一宗流布の濫觴なり弘長元年五月平重時
是れを妬で伊豆國伊東浦に左遷せらるある時相州竜口の汀にして誅せらるべしとて

敷革の座につきける天俄にかきくもり震動して太刀取眼くらみ剱段々に折れけり相模守
大に驚き死をゆるしぬ又文永八年には佐渡国に流されぬしかれどもつよく天の咎あり
されバ赦免状をもつて鎌倉にかへりしより宗派海内に隈なく流布し遂に相模守も貴
敬し上人ハ文永十一年五月に鎌倉を出て甲州身延山に入て艸菴を結び春の朝は花
を折て佛に供し秋の夕ハ山月を詠て經書を照し又ある時夜の雨の窓にむかひては

むかしハ邪にふかる人もあはれ風のそよぐの窓をたゝくらん　日蓮上人

後宇多帝の御宇弘安五年十月十三日武藏國荏原郡池上宗仲が家にて遷化しあへり　行年六十一歳

鎌倉松葉谷の法華堂を日朗に附属し又日印あれ住し日静の時勅願所となり貞和元年
光明帝の勅によりて相州鎌倉より爰に移し六條堀川に移せり　此地古ハ六条判官為義の館之跡 義經もまた居せしと平家物語にあり

本堂ハ法華經を本尊とす　之れの筆 日助僧都一字　立像堂には釋迦佛を安置す 一豆別縁来の縁底より漁人の網にかゝりて出現し

祖師堂　日蓮上人の親具外日朗日印日静日像の親を安置す此寺へ刹堂　鬼子母神十羅刹女を安置す　八条戒光寺の薬師堂なり一尾に戒光寺の跡あり

方丈　妙法花院と称す此亭初ハ江州安土にあり画ハ狩野永徳の筆額ハ水戸黄門光圀卿の筆なり

磨社　坊丈の庭にあり尊氏公の寄進の鐘楼を建立し擁護のためにかくのごとく

泉諦石　一名祈願石ともいふ　鴛鴦曼陀羅　日蓮上人の筆　義貞ハ亡魂を地藏の袍として是を本圀寺に切とるごとく

佐女牛の井ハ醒井五条乃南にあり井筒に銘あり

佐女牛井

元和二年
有楽再建之

足利将軍義政公茶道に寵せらるゝ此ころ此水を愛しなふとぞ今ハ用ひるものなく草茂り苔深し井筒も埋まかるをりしも泉あるをむかしより涌出るく李白が譲に

石梵冷蒼苔
寒泉湛月明

これらの泉水にかよふべし

本願寺ハ西六條にあり宗旨ハ親鸞聖人の弘法なり（聖人の伝ハ末巻華頂山に）当寺ハ草創ハ亀山院御宇文永九年聖人の息女覚信尼公（日野左衛門佐広綱卿の室なり）勅を蒙て洛東大谷に始て廟堂を建立す（開山滅後十一年に当る）亀山院勅願所として龍谷山本願寺の號を賜ふ第二代如信上人（開山の嫡孫善鸞上人の息なり覚信尼の猶子なり）其頃奥州大網郷に居住す故に覚恵法師（広綱の子なり母ハ覚信尼なり）第三代覚如上人大谷の留主職となり夫より覚如上人を第三世と継で後伏見院正安元年に勅願寺となる綸旨を賜ふ第八代蓮如上人の時宗義大に繁昌し究開山の在世に超るより山門の衆徒これを妬で寛正六年に当寺を破却しむ寺門三井の流法ハ蓮如上人ハ小園城に小荷擔し近松寺に寄附し聖人の影像ハ大津に移されける蓮如上人は山州山科郷に御堂囲し越前吉崎に御堂を営北陸七州を化益し其後文明十一年山州山科郷に影堂を建立し第九代実如上人に伝承し第十代證如上人の時御堂を摂州大坂石山にうつし十一代顕如上人の時二品親王の勅書を賜り御門跡の號を勅許しあり又御堂を紀州鷺森にうつし遂に天正十九年八月六條堀川に移す（委く信長記拾遺にあり）本堂ハ開山親鸞聖人自作の影像を安置し（此像ハ開山在世の時彫刻しめ給ひ息女覚信尼にさづけたまふ聖人の滅後遺骨を細

西六條 本願寺北御門前

挂して漆に和し彩色泥塗せり故に骨肉御影と称す坐像にして長さ一尺五寸餘也文章堂ハ大谷本願寺のよし紫宸殿拝領より御堂造りハ紫宸殿の模形也堂前の高欄ハ内裏に同し南北の脇壇にハ前住大僧正其外歴代の画像を安す餘間にハ九字十字の名號并安す寂如上人の筆也 毎年報恩講七昼夜の法会にハ八幅の絵傳を壇上にかゝる 阿弥陀堂本尊阿弥陀仏ハ立像長三尺餘にて春日の作也脇壇にハ高祖聖徳太子法然上人の画影を安す 當御門主法如上人の御識也 集會所 法会執行の時僧侶ありて会合す 轉輪藏 一切経を藏む額ハ寂如上人の筆也 撞鐘堂 鐘ハ旧太秦廣隆寺にありて少納言信西入道の銘あり由縁撞銘ハ信長記拾遺に委し 鼓樓 此太鼓ハ大和國西大寺にありし銅皷なり其由縁を弁む豊臣家の士方ハ坊官下間氏にありされ 唐門 南の築地長辻にあり此門ハもと豊國社にありしなり人物虎の間より来れる走獣等の彫物荘厳にして希代の奇也 對面所 大広間といふ絵ハ長谷川了渓の筆なり前に能舞臺あり 四方に虎を画 浪間 天井に波を画南の方に車よせあり聚楽亭よりうつされしを 白書院 小広間ともいふ画ハ右に同筆なり前に能舞臺あり 黒書院 西ハ狩野探幽の筆なり 其外関雎殿滴春館永安館桃仙館等の殿舎高閣多しといへども繁多なれば略す大仲居臺所といふ又伏見城にありしをうつされしなり入口の唐破風に大黒天の像あり二ツの俵を踏 滴翠園 集会所の東にありて名區の十勝あり 高樓を飛雲閣と號す久代秀吉公の時聚楽亭にありし故また其名を號へ

本堂
白書院
虎の間
對面所

本願寺
花畑

九條関白尚實公の御筆之閣上の画ハ霞に富士中閣の画ハ三十六哥仙ともあり
古法眼元信が筆之下を部賢殿といふ 飛雲閣の記ハ殿中の東にかゝる十六世湛如上人の御作にして當御門主法如上人筆を染給ふ
池ハ高樓を巡りて常に船を浮むる也 倉浪池といふ 龍背橋ハ西へ渡して踏花
塢あり此邊櫻木数品あり胡蝶亭の傍にハ夜光石あり嘯月坡ハ池の巡りの
坡をいふ 黄鶴臺ハ高閣の西にある御湯殿なり 醒眠泉ハ一名古醒井といふ 洛陽七井の其一なり當新御門主
文如上人の 艶雪林にハ梅花多く 青蓮榭ハ茶亭にて又澆花亭ともいふ 簡文が
碑の銘あり
遊し華林園に同うして鳥獣禽魚此の川かつて来つて人に親しの芳園なり

常樂寺 西本願寺のおもてにあり

本尊阿弥陀佛ハ春日作也 立像長二尺 開基存覚上人 本願寺第三世覚如上人の嫡子
此人聡明叡智にして顕教を玄智僧正にうけ密教を経恵僧正に学びその奥旨を悟り且詩歌を善くして多く著述せり當寺初ハ大谷通に営其後洛東今小路に遷され常楽臺と称す文明十九年此地にうつる

興正寺 西本願寺の南に隣る

本尊阿弥陀佛ハ安阿弥の作也 當寺の初ハ宗祖親鸞聖人四十歳の時附
山科の郷中に造営し興正寺と名づけ高弟真佛上人に附属しあり其後今比叡竹中
庄汁谷よりし後醍醐帝の御時佛光寺と改む 委ハ巻首佛光寺の所に 十四世經豪上人本願寺蓮如
上人を帰依し佛光寺を出て新に一堂を建て旧号を用て興正寺と称す 十七世顕尊上人の左世永禄十二年に門跡号を賜ふ天正十九年此地にうつる

興正寺

東本願寺ハ烏丸七条の南にあり宗旨ハ親鸞聖人の弘法にして開山より第十一世顕如上人の嫡子教如上人慶長七年関東の　台命を蒙りて六町四方の寺地を賜り新に御堂を營まるゝ東本願寺御門跡と称し宗祖より十二世の血脈を相續せり本堂ハ親鸞聖人自作の像を安置せり　坐像にして長さ八寸餘あり此尊像ハ上州厩橋妙安寺にあり　台命によりて當寺に遷す　脇壇東ハ前住大僧正其外歴代の畫影を安す餘間西ハ九字十字の名號をかゝる開山聖人の筆なり阿弥陀堂の本尊阿弥陀佛ハ安阿弥の作也　立像にして長三尺　脇壇東ハ聖徳太子法然上人其外三朝六高僧の畫像を安す　大門　本堂のまへにあり階上に釈迦弥勒舎利弗を安置せり、　菊門　大門の北にあり初ハ秀吉公の壮観にして伏見城にあり双の扉に菊花の大紋あり金を鏤め花餝を施して洛中の奇観なり　阿弥陀堂の門　これも伏見城よりうつされしとぞ世の人日暮の門といふ　撞鐘堂　伏見城中の井戸屋形なりといふ　玄関　式臺摘にして長七間幅三間の一枚板也　寝殿　大廣間と号す画ハ山楽の筆　小寝殿　小廣間ともいふ画ハ探幽山雪の筆也　白書院　黒書院の間小鷺の間あり能舞臺ハ集會堂の西にあり其外殿閣堂舎等花餝を施し華麗して佗境に勝れ繁栄よりて其名を略す

東殿　今ハ舎間屋舗なり　台命によりて境地を賜り東本願寺の別館とし舊跡所なり

臺所
大門
石井
下間

本堂
阿弥陀堂
役所

東殿

東本願寺別荘なり俗には百間屋敷といふ

河原院の旧跡にして池島の出嶋に九重塔あり是河原融大臣の古墳なりといふ此所に融公の社あり
境内の隣地下寺町万年寺ふう門をとうりといふ 池水は東の高瀬川より流まて常に溶々たり水戸を獅子口といふ
臨池殿の庭は小堀遠州の好なり風光奇々として真妙なり
炬火殿は七條鴨川の西にあり祭所倉稲魂命と風神を併せて天智帝の勅請也
又稲荷の祭礼の日神輿臨幸の時七條河原に於て松明を照し神輿を迎ふるなり
此社の舊例にして故に名とく 當社は舊弘長二年二月神詫によりて七條の南東洞院の東に建立し其後應仁の乱後鴨川の西七条の北に遷し寛永八年今の地に遷るを
いふりの祭日

家集 稲荷山今夜は焼しもえふしそ都のよそにみえわたりけり 貞徳

金光寺は七条河原町の北にあり當に七條道場と称す時宗にして本尊は阿弥陀仏を安置し
脇壇に一遍上人の像あり 此上人の俗姓は伊豫国河野七郎通広の息也あり 別府通廣ノ妾二人碁盤を枕として臥とかの両女髪蛇と化して頭をならべ闘ふ
通広これを見て大に驚き忽劔をぬいて悉くに斬きれより妄執輪廻を観察して不覊乃
僧となる時に建長年中也始は台教を学び又熊野に詣で権現の示現を蒙り四句の
文をさとりしより時宗と改む 舊此地は佛工法橋定朝が宅也後に上人に寄附してきるとなん
六十万人決定往生の札を弘む
歓興寺は九條烏丸にあり本尊観世音は慈覚大師の作なり 洛陽観音巡りの其一なり
宇賀社は九條の東にあり祭所宇賀神也此所の東西の径を宇賀辻子といふ

數内紹智の家ハ西洞院小小路の北にあり鼻祖劍仲紹智ハ千利休の高弟にある時師に向ッて曰秀吉公の寵余人に超たり遠き慮なけれバ近き害あらんと諫しかど利休甚不興にして紹智を退けれバ大徳寺の三玄院に寓居し利休の滅後洛に棠竹に住し専ら茶道を行ふ其後鷹司通町今の下長者町なり 新町の西にかへてそれより本願寺御門主良如上人の招きにより今の地に止住し故に茶道の下流と称して利休嫡傳の正流なり小堀遠州の数寄屋あり 大坂御陣の時此家に寓り出陣しこれを遠州の八ッ窓と號し

芹根水ハ堀川通生酢屋橋の南にあり 近年書家烏石葛辰清水を井筒に入て傍に芹根水の銘を刻し八分字を書して石面に彫刻す公卿の詩歌を集む其序文に曰

源融公むかし此邊に別業たりし風景を愛し院を今のかの竹林にある所にあいて奥別に賀茂の塩竈の景をうつし汐汲のありさまを弄れしよりそ其邸宅の用水とうしふやかくそのめぐく清水湧出て絶せぬハなくもくるハぬ霊水なりとて石欄石鉢をうちすへて名蹤乃所以を公にせんとす今此その資を喜捨して烏石先生筆を揮ひて勇アそ経営れたり諸君子其事は善くして文藻を属まうて寛雅公ハ轉法輪殿の御子にて随自意院親王御猶子にて上の醍醐報恩院を住持しのち大僧都法印なり先生の御勧めにかへバ御作あるまじあり公卿の和歌繁多によつて是を略す

稲荷社 油小路生酢屋橋通の南にあり當所稲荷本社の御旅所の社人田中氏此所に住居す **不動堂** 稲荷社の南にあり不動明王を本尊とす不動堂此所の名とす

道祖神 不動堂の南にあり祭所猿田彦命也 古ハ五条新町の西にあり首途神と称す **書聖天満宮** 道祖神の社内にあり烏石葛辰碑の銘を建る篆字ハ園白駒の筆なり

稲荷御旅所 道祖神の南二町にあり稲荷の神輿五座毎年三月中の午の日に神幸ありて四月初の卯日還幸なり古ハ五座の神輿所々に別て御旅所あり

春日森 蔵王森 稲荷御旅所の南にあり由来不詳 **寛筝石** 蔵王森の南にあり此所寛筝供奉の遺跡なり寛筝ハ伏見にしありておかしてあり

真霊雷とありて此地に落て巨石となる平家物語に曰二条院の御因にも御神をそれよりしてそ寛筝供奉ハ霊とふや長明無名抄に云六月廿六日ハ寛筝が日なりとぞ

古御旅所 八條坊門金替町の南にあり昔し此所ハ二階堂観世音ありしくて坤より福子稲富といふ今此観音ハ泉涌寺の内善能寺にあり此社の前通り戒光寺町にいます也今泉涌寺の内にあり **紫守長者** 弘法大師縁起に曰空海稲荷に対して其の大悲の釋迦佛を安置す

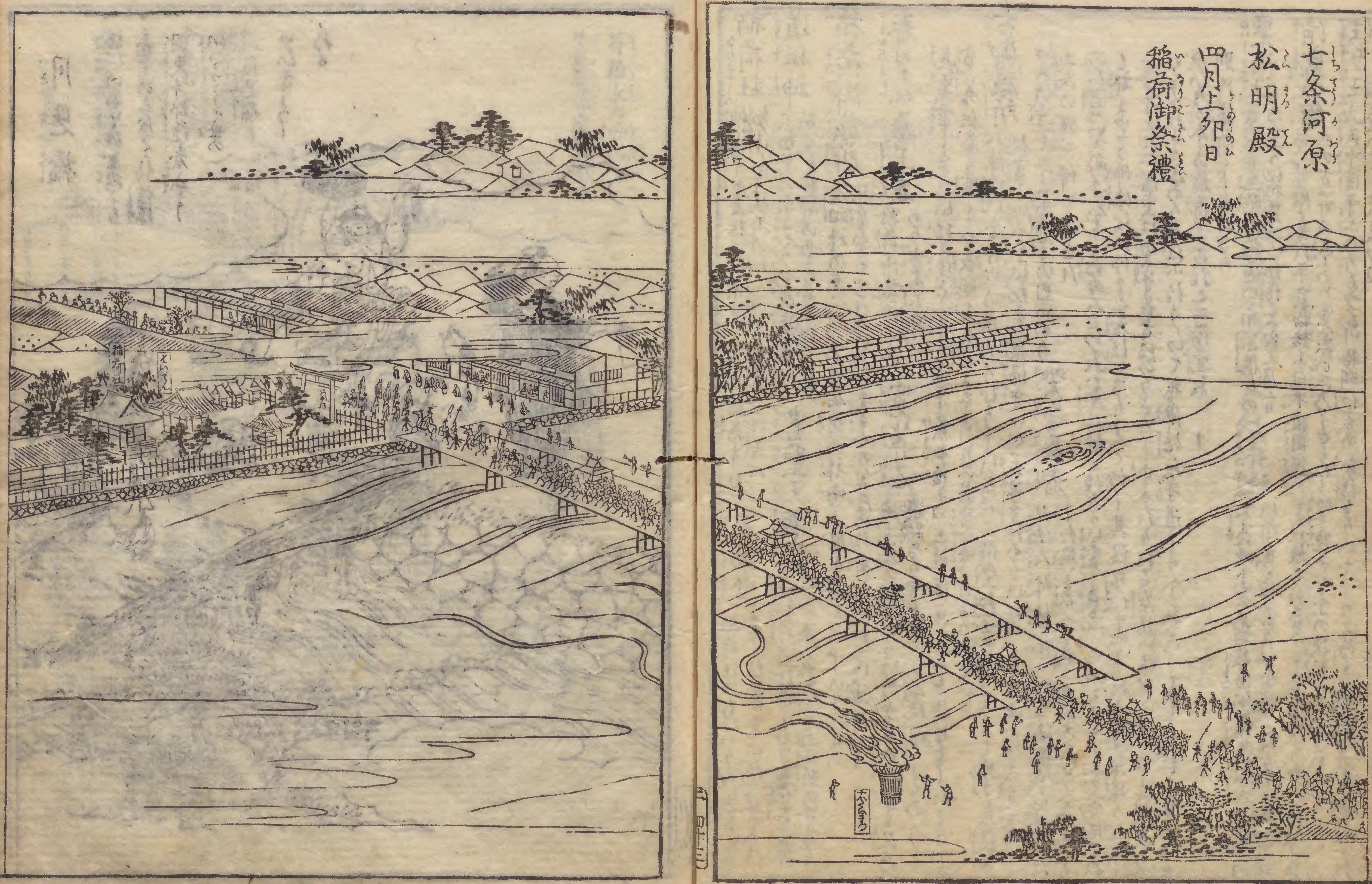
それ君ハいかなる人ぞと問ければ我ハ都八條に住る紫守長者といふものなり昔空海これも都にありて佛法を弘めんと親しく約して法を守らるゝ人と縁し其後弘仁十四年に東寺を賜り住職さすからに二階堂に紫守長者ハいらう(?)して申されけれバ空海ハよろしく迎て祀し稲荷れ給にとぞ只今の稲荷ハ此にゆかりて我も佛法を守護し給へと社をいとなみ自額を書てまうりせ

ゆかりの今の稲荷山これ二階堂なり則御旅所としのりけり

粟嶋社 堀川の西生酢屋橋通の南宗徳寺の **古井社** 大宮八條にあり梅白渉道綱羅生門に登れと建つ内にあり紀州粟嶋の勧請なり二月三日 此所は馬とたるが如れど大不挿る故に今の位置に記不詳

清盛の館 西八條殿と号す平家物語に曰平相國禅門とのへ八條にて大臣をかけにて八条より北へ坊城よりの西の方一町の亭なりしか今の入道をいせられ暁にいたるまでひの棟数五十余におよべり

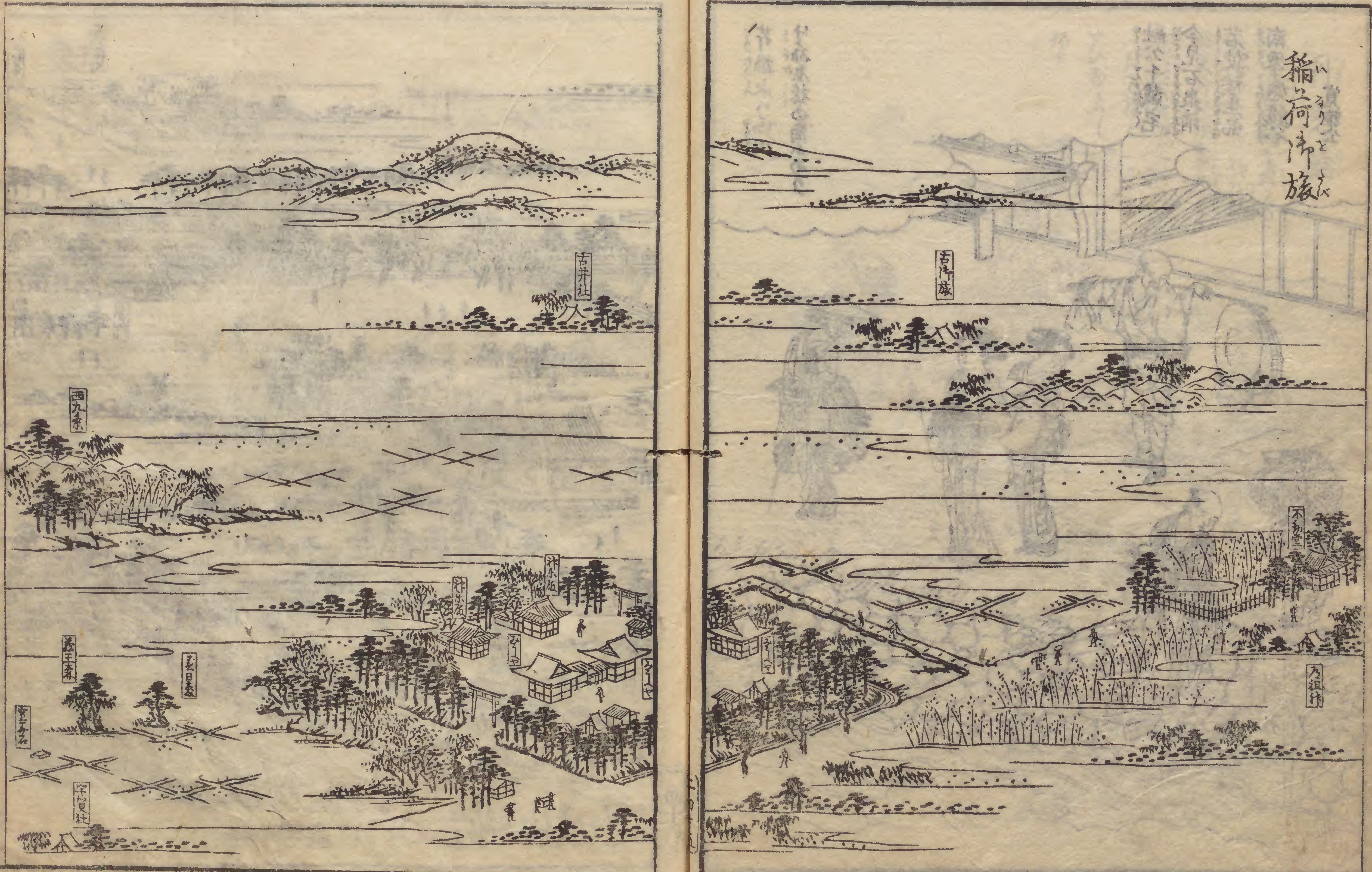
住吉社 祭ハ六月廿八日なり 大宮中道寺にありまつる所摂州住吉の勧請なり此所いふに傍に傾城町の老松神とも



七条河原（しちでうかはら）
松明殿（まつみやうでん）
四月上卯日（うづきのうのひ）
稲荷御祭禮（いなりごさいれい）

月見橋
堀川の南生斫屋橋より
西の方なれば信濃
国更科郡姨捨山より
似たるにて世の
人月見橋と
いひならへ
る

芹根水は堀川
生斫屋橋の南にあり
融公千載宅
今見石泉清
若使陸生品
南零應譲名
寛雅公
芹根水



稲荷御旅
古御旅
不動堂
古井社
西九条
宇賀社

東寺
大師堂
南大門

食堂
番所

遍照心院
へんぜうしんゐん
神廟
六孫王社
五所社
本地堂
佛殿
貞純社

八幡山教王護國寺秘密傳法院 東寺又左寺とも號す 大宮の西八條の南にあり真言宗の
源にして開祖ハ弘法大師舊此地ハ大内裏の鴻臚館にして来朝の賓客を供す之
漢朝の鴻臚館を不空三藏に給ひて精舎と営し其例に准じて弘仁四年此を
空海に給ひ右寺を守護に偏に称弘法大師ハ讃州多度郡屏風浦の産にして
光仁帝寳亀五年に誕生あり十八歳にして大学に至り志佛経にありて遂に出
家して延暦十四年東大寺の檀にのぼり具足戒をうけ名を空海と改む霊夢に
よりて和州高市郡久米道場の東塔の下にて大毘盧遮那神變加持経を得
ところ文義暁しがたくされバ延暦廿三年五月に入唐して唐の貞元廿一年二月十一日
青龍寺の慧果阿闍梨に謁しかの經の奥儀真言秘密をうけ大同元年十月に
帰朝して傳来の密法を弘むある時嵯峨帝勅ありて内裏に於て諸宗の名
僧とかの空海にめんして所の宗義を論ぜさせ給ふに空海の曰我宗ハ大日神
變の真言一度阿字を観ずれバ即身成佛をとぐと諸宗一同にこれをやぶりて議論を
さばきがたし帝空海に即身成佛の法を示せと勅ありけれバ則五藏三摩地

觀に入忽首より五佛の寶冠を出し身より五色の光明を放ち面貌金色にして毘盧
遮那佛となる帝ハ御座をおりて是を拝し給ひ諸宗の僧ハ合掌して地にふしたちまち議論
おさまりけれバ宗風日本に弘まる弘仁七年に紀州高野山を賜て金剛峯寺を建立し仁明帝
御宇承和二年三月廿一日六十二歳にして高野山に入定し給ふ其後延喜廿一年に弘法大師
と謚を宣下しありける 日本に生死不思議の人三人あり生ありて死なきハ空海 死ありて生のなきハ天満神生も死もなきハ人丸なり
金堂 本尊ハ薬師佛脇士ハ日光月光なり焼失の後 豊臣秀頼公の再建にて東大佛殿の模形なり 講堂 本尊ハ大日如来脇壇に八 金剛菩薩五大尊四天王
等を安置 食堂 本尊ハ千手千眼観世音聖寶僧正の作なり脇士ハ地藏毘沙門天 安置されし地藏ハいにしへハ西寺にあり毘沙門天ハ羅城門の楼上にありしを
移す 夜叉神 いにしへハ食堂の門に安置されし今礎石あり左右の小堂に 雌雄の夜叉神を安置大師の作なり 五重塔 四仏を安置し
焼失の後 御當家の再建なり此塔一とせ南の方へ傾くときに より々心の方に法を修して其傾きを直されし 灌頂院 秘密灌頂の所なり
八幡宮 大師神影を拝して彫刻したまふ 八嶋社 當寺建立以前の 神像なり當寺の鎮守なり 故に地主の神となれり 勅請なり
寶藏 大師の法具を藏む 瓢箪堀 宝藏の南の池なり 巡りに池あり 瓢箪の形なり 南大門 二階の楼門也 金剛力士を
安置す東ハ 慶賀門 東の門を 西ハ湛慶の作なり 蓮華門 西の門をいふ大師入定のとき此 門より出てかへりたまふとぞ
猫瓦 巽の方の築地の上にあり此築地造営の時ハ 梶原景時奉行せしといふ

西院 開祖弘法大師の影を安置す法眼康勝の作なり後堂にハ大日不動なる

大黒天 西の院の傍に安す 愛染明王 安置す 四天王 般若菩薩を安す大師の作 宝持坊に 五寶石 一名不動石ともいふ 後堂の白砂にあり 大黒天 大師の作なり

三鈷松 西の院のまへにあり大師唐土より帰朝のとき密教相応の地あらバ此三鈷止るべしと空中に投給ふ上洛の後此所の松枝に止りたり故に名とす三葉の松なり

松子房松 西の院の乾にあり

桜雲記に曰 元弘三年五月六波羅の攻落され越後の船上山へ注進あり後醍醐天皇則入洛あり播州書写山にて新田義貞より仲時高時滅亡の事を注せん楠正成兵庫にて迎奉る同日勅願によりて東寺へ行幸松子房にて此松のもとに御輿を立る時のよし奏しくて前大僧正頼意ありて詠る

植置しむかしやしらで契りけん天の御幸を松風の声

羅城門の舊跡ハ朱雀通 今の千本通なり 四塚にあり此門ハ桓武天皇平安城造営の時初て建らる所大内裏より南面にして外郭の惣門なり 楼上に毘沙門天を安す伝教大師の作なり今東寺の金堂にあり

梅城録に曰 都良香羅城門を過る時 気霽風梳新柳髪と詠じけるに楼上に声ありて氷消浪洗旧苔鬚と付けたりこれを菅丞相の御前にて語り給ひしかバ上の句ハ自歎じ給ふ下の句ハ鬼神の作りしなりとおほせられける

萬祥山大通寺遍照心院ハ八條櫛笥にあり此地ハ源経基公の殿舎にして天徳五年に薨じ給ふ後此所に霊廟を建六孫王権現と崇奉り其後鎌倉右大臣實朝公の後室二位禅尼大檀越となりて真空律師を請じて開山とし戒律三論真言等兼学の梵刹となすなり

佛殿 本尊阿弥陀佛ハ運慶の作なり 本地堂 本尊不動明王ハ興教大師の作

六孫王社 祭る所ハ経基公の神霊也源氏の祖神にして御当家の造営なり神前にハ諸候より奉納の石燈籠数多ありまつり九月十一日

神廟 本社の後にあり 貞純親王社 本社の巽にあり

神龍池 神前の池なり放生会あり 弁財天社 長さ一尺五寸余 弘法の作なり 誕生水 源満仲公誕生の時此水を汲て産湯とし給ふ清陽の名水なり

阿弥陀佛 立像長二尺五寸安阿弥の作にして親鸞聖人の持念仏なり初ハ山城林寺にありしを佐々木定綱當寺に移す今門内の 宝冠釈迦佛 方丈に安す實朝公の念持仏 定朝の作 七井の其一つなり宝蔵にあり二月十五日開帳なり

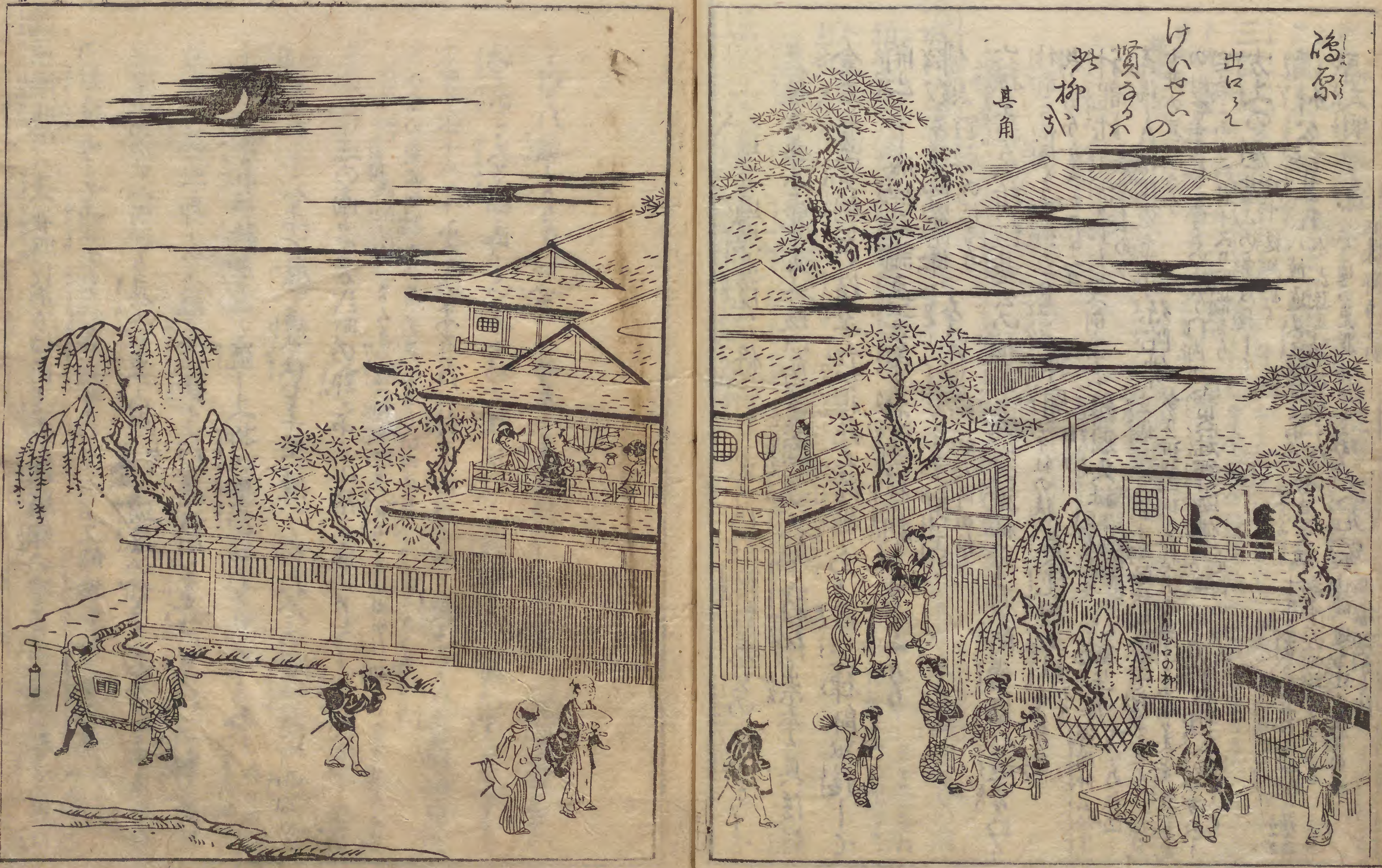
方丈の庭 盧山の景を模して庭中に滝あり

満仲公誕生池 八條通大宮の西にあり今六孫王御旅所となる

歓喜森 七条朱雀の東にあり此所ハ歓喜寺院の旧跡なり

福大明神森 壬生通の東揚梅の北にあり由来詳ならず

人丸塚 坊城通る辻の南にあり由縁詳ならず


嶋原
出口にて
けいせいの賢なるハ柳哉
其角
出口の柳

嶋原傾城町ハ朱雀野にあり此所上古ハ鴻臚館の地なり中頃ハ観喜寿院
の封境にして西口の畠ハ字を堂の口といふ又傾城郭ハ万里小路（今の柳の馬場）にあり
二條の南方二三町なり其先ハ東山殿（義政公）遊宴の地なり天正十七年原三郎
左衛門林又一郎といふ浪人上訴によりて傾城町を免許せられ一の郭をひらき
しなり地名を新屋敷と號し又柳の雙樹ありければ柳町とも称ス（今の出口の柳ハ此遺風存也）
より十二年を歴て慶長七年に六條へうつされ今の室町新町西洞院
五條橋通の南にて方弐町の郭之中に小路三通ありしにより三筋町と號に（六條通今の魚棚西洞院川より西の名橋ハ傾城町の入口にして此附かけ初し之今にありて室町又条の南西側醞延の居宅異風なり此附の志ハ多して今に存せり）
又寛永十八年に今の朱雀野へ移されて嶋原と號るもとハ其頃肥前の
嶋原にて天草四郎といふもの一揆を起し動乱に及びし時此里もうつて
うつされ騒しかりければ世の人嶋原と異名をつけしより遂に此所の名とせり

国立公文書館
National Archives of Japan